



御神忌 千百二十五年
半萬燈祭
 未来へつなぐ誠の心

令和9年 | 2027

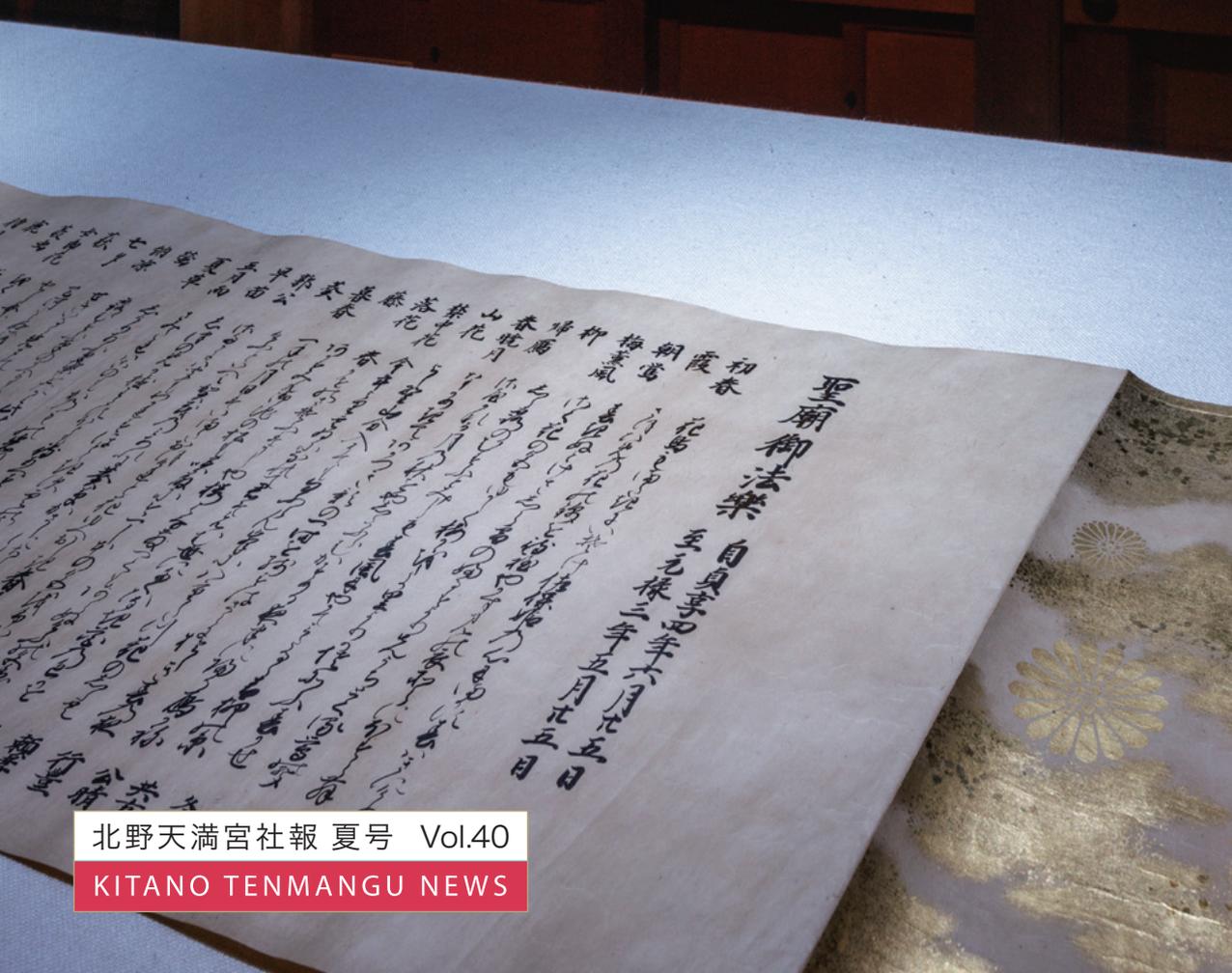


天満宮

題字／後西天皇御宸筆

特集

- ◆ 全国の天満宮に先駆け千百二十五年半萬燈祭の御神燈が点灯
 梅風講社皆燈講により賑々しく萬燈提灯の献灯式典挙行
 裏千家千玄室大宗匠ら参列され奉告祭齋行
- ◆ 勅祭に由来する「令和の北野祭」再興 令和九年に向けて益々加速
 例祭(大祭)を中心に、御手洗祭から北野祭瑞饋祭まで続く一連の祭礼
- ◆ 天神さまと私 —— 京都大学名誉教授・石川県立歴史博物館館長 藤井 讓治さん



日本文化の中心地 京都
その文化の礎を築いた天神信仰発祥の社

北野天満宮の由緒

当宮は御祭神に菅原道真公（菅公）をお祀りした全国天満宮・天神社一万二千社の宗祀（総本社）の神社です。天神信仰発祥の社として今から千年余り前の村上天皇天曆元年（九四七）六月九日、御神託により平安京の天門にあたる北野に御鎮座致しました。天徳三年（九五九）右大臣藤原師輔卿が御社殿を造営、一條天皇により北野祭は官祭に与り、「北野天満大自在天神」の神号を賜り、さらに皇室・朝廷の崇敬を受け臣下として初めて二十二社に加えられ、官幣中社に列格、皇城鎮護の神として崇められるとともに、天満宮・天神社の総本社として崇敬されてきました。

創建以来、皇室との御縁深く、寛弘元年（一〇〇四）には一條天皇がはじめて北野社に行幸されました。以来歴代天皇の行幸も二十数度に亘り、さらに將軍家や有力大名の崇敬を受けました。菅公薨去延喜三年（九〇三）より凡そ百年の歳月をかけて誕生した北野の天神信仰は、平安京の天門にあって、朝野を問わず人々の暮らしの最も重要な指針となり今日まで育まれてきたのです。「文道大祖 風月本主」と崇められた菅公は、和魂漢才の精神で誠の心を以って学問に勤しまれたことから、学問をはじめ芸能・農耕・厄除け・至誠・冤罪を晴らす神として奉祀されるとともに、人々の心の支えとなる神として、各時代の社会構造と相まって篤い崇敬をうけ、庶民に至るまで「天神様」として親しまれてきました。菅公は、学者・政治家また詩人・教育者として多方面に活躍され、生涯一貫された「誠の心」は、日本人の感性として現在にも生き続けています。

千有余年に亘る歴史の中で受け継がれてきた天神信仰の根本を示すのが、当宮所蔵の国宝「北野天神縁起絵巻」承久本です。数ある縁起絵巻の中で唯一無二の神社絵巻物であり、その信仰性や描かれる世界観、美術的価値は世界が認めるところであります。また現在の御社殿は、豊臣秀吉公の遺命により豊臣秀頼公が片桐且元を奉行として、慶長十二年（一六〇七）に造営された一大建築群です。御本殿は八棟造と称され、国宝の指定を受ける桃山文化の代表的建築です。その絢爛豪華さは謂うまでもありませんが、特に多数の桃山建築中での創建当時の規模そのままに保存されているのは当宮が唯一のもので、後世の権現造の原型となるなど、神社建築史に多大な影響を与え続けています。

菅公の御神霊を祀る北野天満宮は、御墓所・太宰府天満宮と共に全国天満宮の宗祀と称され、日本文化の礎、学問の神様として今日も多くの参詣者が訪れています。



【シンボルマーク】
平安京の天門に位置する北極星を星梅鉢と鳥居（北野）で捉えたマーク。北野は千二百年に亘り、国都として文化を育んだ平安京にて、天の神々の出入口「天門」に菅原大神が奉祀された聖地です。爾来、北野の地より全国に天神様の御神威が益々昂揚していきましました。

表紙写真 — 初公開 重要文化財 新指定『北野聖廟法楽和歌』—

「聖廟」とは北野天満宮であり、法楽とは天神様をお慰めするために、詩歌や芸能を奉納することをいう。和歌三神は、天満大自在天神・住吉大明神・玉津島明神であり、天神は、宮中はじめ萬民の崇敬する「和歌の神」であった。菅公の御心をお慰めする当宮の法楽は、「聖廟法楽」と称され、和歌や連歌を献ずることは、後世まで朝廷公家衆の慣習とされていた。令和6年度の新指定重要文化財となった当宮所蔵の「北野天満宮聖廟法楽和歌」三巻、630枚は、「和歌の神」として信仰された北野の天神信仰を今に伝える。



御挨拶

菅公精神から成る縄文の美的感性と死生観

先ず以て聖寿の万歳と皇室の弥栄を壽ぎ申し上げるとともに、国家の隆昌と氏子崇敬者皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

さて、本年元日に発生した能登半島地震から半年以上が経過し、各地の復興が僅かながらも進む中、奥能登（珠洲市・輪島市等）の復興が未だ困難な状況にあることは報道の通りです。かかる事態に鑑み、去る二月二日、全国天満宮梅風会会長として、同会石川県支部長をご慰問申し上げますとともに、会則に則り、被災された加盟神社三十一社に対し義捐金を手交させて頂きました。

また当宮では、全国の天神社の中でも最古社の一つに数えられ、当宮の第一荘園（菅原荘）として御神縁深き石川県羽咋郡鎮座の菅原神社にて、県内鎮座の天神社の復興祈願祭を斎行し、改めて被災各社の一日も早い復興と、氏子崇敬者各位のご安寧を心よりお祈り申し上げます。（仔細は本号六頁〜七頁参照）御祭神菅公が、遠く九州大宰府の地にて薨去され、彼の地で菅公思慕の靈廟祭祀が執り行われる一方、国都京の都においては、菅公敬仰の機運が醸成される中、村上天皇の勅命により平安京の天門に北野社が創建され、遂に永延元年（九八七）には、一條天皇が幣帛を奉り、国家の祭祀として勅祭「北野祭」が斎行されました。続いて、寛弘元年（一〇〇四）には、一條天皇が臣下である北野社に行幸されるという前代未聞の事態となり、愈々天神信仰が「御霊」と「学問」の両面から昂揚し、全国に伝播していきましました。そして、その信仰伝播の中心が、根本縁起である国宝『北野天神縁起絵巻・承久本』であり、この絵巻によって、信仰を深める大元を示して参りました。

中でも、後段の清涼殿落雷から「六道巡り」では、平安期以降の混沌とした世情と、厭世的な末法思想の影響を受けた当時の世界観が描かれ、人が生死を繰り返す、生前の引業により新たな命に生まれ変わる、いわゆる「輪廻転生」を表す仏教的要素の強いメッセージが込められています。

斯様な時代に、「救いの神」として人々の心の拠り所とされたのが、他ならぬ天神信仰でした。その背景には、平安京に長く渦巻いた怨霊による不安や恐れ、不安定な社会への不満から生じた御霊信仰が根底となっていたと言っても過言ではありません。怨霊と畏怖された菅公の御霊を、平安京の天門に奉祀する当宮への崇敬は、末法思想と相まって大いに高められました。

わけでも菅公が提唱された和魂漢才の精神は、日本人の死生観をも「連綿たる生の継承」を根源とする祖先崇拜の概念、つまり縄文から受け継ぐ我が国固有の美的感性で捉え、お示しにされたのであります。現代においても天災人災が頻発し、世界中で紛争が止まず、フェイクニュースや流言飛語が飛び交う、まさに不安と不満に満ちた昨今、「賢者は歴史に学び、愚者は経験に学ぶ」との格言が示すよう、今一度歴史を広く顧みて、菅公精神の根幹に想いを致し、「物事の本質を踏み外さず、誠を極めよ」と云う誠心で御祭神の御霊をお慰めすることにより、永遠の平安をひたすら祈念申し上げる次第であります。引き続き、御神縁深き皆様には、天神信仰発揚と天満宮護持のため、倍旧のご厚情を賜りますようお願い申し上げます。

令和六年八月吉日

北野天満宮

宮司 橘

重十九



国宝「北野天神縁起絵巻」(承久本) 卷七 笙の窟に籠居する日藏上人
金峯山の窟に籠もった高僧日藏が、やがて頓死して奇跡的によみがえり、神通力を得て六道めぐりをするさまを描く



全国の天満宮に先駆け千百二十五年半萬燈祭の御神燈が点灯 梅風講社皆燈講により賑々しく萬燈提灯の献灯式典挙行 裏千家千玄室大宗匠ら参列され奉告祭齋行



梅風講社皆燈講はじめ地域の皆様が大勢参列

三年後に迫った菅公御神忌千百二十五年半萬燈祭に向けて、全国の天満宮に先駆けて御縁日の六月二十五日夕刻、御祭神をお慰めする約千七百の萬燈提灯に灯が入った。御本殿で厳肅に奉告祭を齋行した後、御本殿前中庭において、献灯式典を行い、日暮れとともに提灯の灯りが三光門前の参道を明るく照らした。

御本殿での萬燈提灯献灯奉告祭は午後四時半から齋行し、当宮崇敬会である天満宮講社会長の裏千家千玄室大宗匠を始めとする講社理事や梅風講社員、上七軒歌舞会、地域の北野商店街振興組合、上七軒匠会、北野管公会、また地元大学の立命館大学学生のほか、崇敬者ら多数が参列する中、古式に則り鑽り出した浄火を供えた御神前において、齋主が祝詞を奏上し、この日から境内の萬燈提灯を点灯し、三年後に迫る令和九年の半萬燈祭への機運を醸成することを御奉告した。千会長や小石原満梅風講社長、特別崇敬者の豊田晋氏が次々玉串拝礼して祭典を修め、御本殿前の中庭に移動した。

御本殿での祭典に合わせ、氏子崇敬者や上七軒歌舞会の芸舞妓、地域住民らおよそ百人は、一の鳥居前から中庭の献灯式典齋場まで、手持ちの小型提灯をかざして歩き、式典に臨んだ。

宮司が、御本殿前に集った参列者や崇敬者を前に「天神様である菅公は、承和十二年の本日六月二十五日にお生まれになりました。そのような御神縁深い日に、千玄室大宗匠さまご来駕の下、半萬燈祭に向けての提灯献灯奉告祭が賑々しく齋行されたことに感謝致します。令和九年の大祭まで残り三年となり、本日はその始まりとなる日です。皆様方のお力添えを頂きながら式年大祭が盛大に齋行されますことを願うばかりです」と挨拶した。

次に梅風講社小石原講社長が「本日のこの佳き日を迎え、初めて梅風講をお預かりした千百年大萬燈祭のことを思い出しました。われわれ梅風講社皆燈講は、古くよりこの萬燈祭において、菜種油を用いて境内の吊灯籠や石灯籠に献灯をして参りましたが、前回の千百年大萬燈祭より、お灯明に加え、萬燈提灯という形で、御祭神への慰霊の誠を捧げてきました。当時、百五十人ぐらいの人が集まって下さり協力を賜りましたが、皆様方に一灯一灯ご献灯して頂き、

結果的には一万五千もの献灯を頂くことができました。来る令和九年の半萬燈祭に向けて、益々の機運を高めて参りたく思いますので、引き続き皆様のご理解とご協力をお願い致します」と挨拶された。

この後、御神前に供えられていた御神火が、神職によって中庭に一對ずつある霊元天皇と有栖川宮御寄進の石灯籠に灯され、中庭の一角に陣取っていた神若会北野天神太鼓会が威勢よく太鼓を奉納、それを合図に三光門前の奉納提灯に一齐に明かりがついた。夜空にくっきりと浮かんだ提灯の明かりが、御祭神の御心をお慰めするかの如く照らし出され、まさに「萬燈」に相応しい空間を創り出し、夜間参拝者を三年後の千百二十五年半萬燈祭の風景に誘った。

この萬燈提灯は現在も申し込み受付中で、提灯台の増設とともに随時掲げていく予定で、三年後の半萬燈祭が終わるまで点灯される。

講社大祭、厳かに齋行 千玄室会長ご挨拶 「天神さまの御神徳、世界中に広がりますように」

当宮崇敬者組織の北野天満宮講社（会長裏千家千玄室大宗匠）の祭典である講社大祭が、七月四日午後一時半から御本殿において齋行され、殿内と中庭に設けられた特別席に、合わせて約二百人が参列した。

御本殿では約四千人の会員名簿が供えられた御神前に宮司が祝詞を奏上し、巫女四人が神楽「紅わらべ」を奉奏。次に宮司と千会長が玉串拝礼し、会員の無病息災と天神信仰の益々の隆盛を祈願した。

祭典を終え、千会長が内外の参列者に向かい「梅雨の晴間の暑い中、大祭にご参列を賜り有難うございます。令和九年には菅公御神忌千百二十五年半萬燈祭を迎えます。諸準備に向けて、先の例に倣い令和七年と八年の大祭は控えさせて頂きますが、会員皆様方の一層のご協力をお願いし、三年後の令和九年の大祭にお会いしたいと思います。天満宮の御神威が、日本国内はもとより世界中に広がるよう祈りたいと思います」と挨拶された。続いて、直会の儀が執り行われ、宮司が「いよいよ、大祭に向けての準備も本格化する中、平成十四年に齋行いたしました千百年大萬燈祭の前例に倣い、来る令和七年、八年を大祭への奉賛活動を一層充実させる期間とし、令和九年三月二十五日の千百二十五年大祭を、皆様とともに盛大に挙行いたしたく存じます」と挨拶し、直会が執り行われた。



千会長による玉串拝礼



梅風講社小石原講社長が浄火を灯す



直会にて宮司挨拶



神楽「紅わらべ」奉奏



天神太鼓会による祝太鼓



小型萬燈提灯を手に行列に参加する参列者ら



天神太鼓の先導により一の鳥居から提灯行列

千百二十五年半萬燈祭記念事業

令和六年重要文化財新指定記念初公開 「北野聖廟に捧げられた和歌」

北野天満宮 「聖廟法楽和歌」三巻六三〇枚 七月六日より九月二十五日まで宝物殿にて一挙公開！



霊元天皇 月次御法楽和歌

菅公の輝かしい御事績の中でも、稀有の才能を持ち、学業や芸術・文化に優れるとともに、自然を慈しむ豊かな美的感受性を持たれ、数多の漢詩や和歌を詠じ心を寄せられた菅公は、和歌・連歌の神として崇められてきた。歴史を繙けば、『御奈良天皇宸翰記』に、和歌三神の御神号として、「天満大自在天神・住吉大明神・玉津島明神」が記され、天神はすでに「和歌の神」として崇敬されていた。菅公の御心をお慰めする北野天満宮の法楽は「聖廟法楽」と称され、和歌や連歌を献ずることは、後世まで朝廷公家衆の慣習とされていたのである。

来る令和九年斎行の菅公御神忌千百二十五年半萬燈祭に向けて現在当宮では、千有余年に亘る北野の歴史・文化・伝統を繙き、天神信仰の更なる発揚を期すべく種々準備を進める中、これら北野聖廟に捧げられた和歌が、此度新たに重要文化財として指定されたことを受け、今夏七月六日より当宮宝物殿にて初公開となった。

新指定された聖廟法楽和歌は、朝廷の当宮に対する崇敬の篤さを物語るだけでなく、奉納時の様相を色濃く現代に伝えるとともに、当時の作法や使者らの行動などとの対照することで、当時の作法や使者らの行動などの様子も窺い知ることができると大変貴重な史料であり、今回新たに収録された和歌も加え、全奉納和歌短冊、巻子の展示を実施。加えて、その伝授の姿を伝えるべく奉納当時の姿を色濃く残していることが評価されて、附も指定された奉納箱（柳筥含）や文台硯箱を含めた全てを公開し、詩歌の神として朝廷の崇敬を集めた御祭神菅公を顕彰するとともに、今後の国文学・歴史学に資する貴重な文化財として広く発信する展覧会である。



初公開された新指定 重要文化財「聖廟法楽和歌」



「聖廟法楽和歌」 各社新聞でも大きく報道

今回の「聖廟法楽和歌」の調査研究による神社発表から文化財指定までの一連の発信は、新聞各社やメディアでも大きく取り上げられた。その一部を紹介する。

北野天満宮（京都市上京区）は、江戸時代に天皇や上皇から奉納された600首の和歌が、古今和歌集の解釈を受け継ぐ「古今伝授」の後に納められたものだったことを明らかにした。同天満宮の祭神である菅原道真が、和歌の神様として宮中で重視されていたことがわかったという。

同天満宮には、本殿内陣深くに納められ、昭和初期に宝物殿に移された多数の和歌短冊があるが、未調査だった。2021年から、京都大学の藤井謙治名誉教授（日本近世史）と長谷川千尋教授（日本中世文学）が中心となり、約2年かけて調べた。

古今伝授は、10世紀初めの平安時代に編纂された古今和歌集の解釈を、師匠から弟子へ秘伝として伝承すること。秘伝を受け継いだ天皇や上皇、公家は、それぞれが和歌を詠んで短冊に記し、和歌の守護神に奉納した。

北野天満宮への奉納は、後西上皇による寛文4（1664）年が最初で、以後、霊元、後醍醐、後醍醐、光格、仁孝の各天皇が計7回実施。初回と7回目各50首、

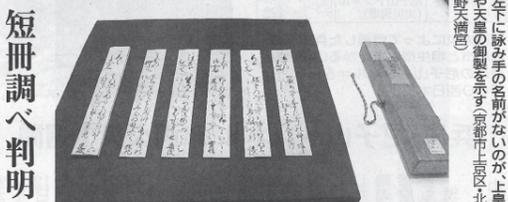
天皇・上皇の直筆など 道真への崇敬示す？

それ以外は100首で、7箱に計600首が収められていた。これまで住吉大社（大阪市住吉区）、玉津島神社（和歌山市）への和歌奉納が知られていたが、いずれも各回50首で、北野天満宮が数で上回る。長谷川教授は「江戸時代の和歌三神といえは、住吉、玉津島、柿本人麻呂と考えられてきた。北野天満宮への奉納は、研究者の間でも知られていなかった」と指摘。上皇や天皇の直筆もあり、「保存状態もよく、近世和歌の研究においても、非常に意味のある史料だ」と話す。同天満宮の橋本九宮司は「学者で政治家でもあった菅原道真公は、何よりも詩歌に抜き出た方だった。和歌の奉納は、朝廷の崇敬の篤さを示している」と話した。今回の研究成果は、「北野天満宮聖廟法楽和歌集」として刊行。和歌短冊の写真をすべて掲載し、くすし字を活字にした翻刻と、解説も載せた。7500円。問い合わせは同天満宮（075・461・0005）。（西田健作）

令和5年10月4日 朝日新聞(夕刊)

菅原道真 江戸期は 和歌の神

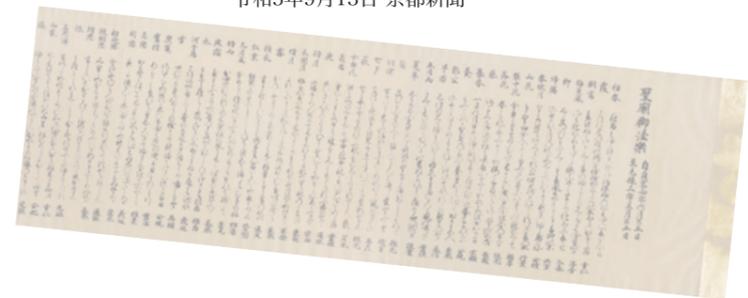
北野天満宮「古今伝授」後 宮中から600首



後西上皇が奉納した和歌短冊短冊の左下に詠み手の名前がないのが、上皇や天皇の御筆を示す京都市上京区北野天満宮

菅原道真をまつる北野天満宮（京都市上京区）に江戸時代、宮中へ天皇や上皇が古今和歌集を解説する「古今伝授」が行われた後、計600首分の和歌短冊が奉納されていたことが分かった。専門家は江戸時代に「和歌三神」として崇敬されたとの説が有る柿本人麻呂とともに、「宮中では道真公も和歌の神として重視されていたことが明らかになった」としている。北野天満宮に宮中から奉納された和歌短冊は、江戸時代を通じて本殿の内陣深くに納められ、1928年（昭和3）年の宝物殿の完成で

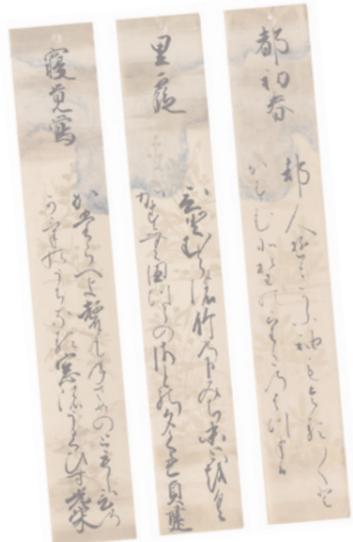
令和5年9月13日 京都新聞



「古今伝授」後の和歌600首 北野天満宮に

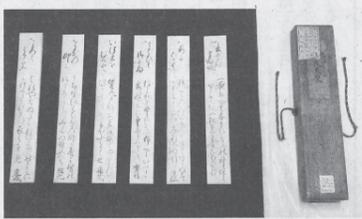


北野天満宮が初めて調査した「聖廟法楽和歌」。三重の箱に入れられて保存されていた＝京都市上京区



奉納和歌 2495首発見

天皇や公家 北野天満宮に



歴代天皇らが直筆でつづった和歌（12日午後、京都市上京区の北野天満宮で）＝川崎公太撮影

北野天満宮（京都市上京区）の神、菅原道真をまつる区は12日、江戸時代に天皇や公家から奉納された和歌2495首が見つかったと発表した。宮中の伝授行った。天満宮では、江戸時代に事土伝授の後に詠まれ、朝廷から奉納された和歌を入れた木箱10箱が保管されてきた。専門家は学

問の神、菅原道真をまつる天満宮が和歌の神として重んじられていたことを示している。調査は、長谷川千尋、京都大学教授（日本中世文学）が中心となり、約2年かけて調べた。古今伝授に伴う短冊の奉納は「和歌三神」とされる住吉大社（大阪市住吉区）などでも確認されているが、北野天満宮では初めてという。調査した長谷川千尋、京都大学教授（日本中世文学）は「他の神社より和歌の数が多く、保管状態も良い。近世の和歌研究の貴重な資料となる」と話している。

令和5年9月13日 読売新聞



勅祭に由来する「令和の北野祭」再興 令和九年に向けて益々加速

例祭(大祭)を中心に、御手洗祭から北野祭瑞饋祭まで続く一連の祭礼

◆ 祭礼期間 八月一日から十月五日 ◆ 例祭・北野御霊会 九月四日斎行

室町時代には最盛期を迎えた、都を代表する祭礼「北野祭」

九月四日に斎行する「例祭」は、遙か平安の御代、永延元年(九八七)に一條天皇が臣下である菅原道真公を奉祀する北野社に勅使を差遣し、「勅祭」として祭典を執り行われたのを起源としている。平安王朝文化を具現化する京都随一の祭礼と伝わり、室町時代には幕府主導の祭となり、なかでも三大將軍足利義満公の時代は、幕府の絶大な庇護を受けて、北野祭はまさに最盛期を迎えたといえる。

かつての北野祭
現在、神事は「例祭」に、祭礼行列は「瑞饋祭」に
それぞれ受け継がれているが、令和九年には元の姿に



かつての勅祭「北野祭」を継承する現在の「例祭・北野御霊会」



かつての勅祭北野祭を今に伝える第一鳳輦(村上天皇御寄進)

厳肅な祭典と、神輿を中心とした華麗な渡御列を併せ持つ往時の北野祭の祭礼期間は、御手洗祭による祓の儀式から始まり、北野祭本祭までのおよそ一カ月間にもわたる壮大な神事であった。しかし、幾多の戦乱や時流の変遷を経た現在、かつての北野祭は、神事を「例祭」、祭礼行列を「瑞饋祭」と、二つの祭礼に分かれた形で継承されている。来る令和九年の菅公御神忌千二百五十年半萬燈祭に向け、かつて京都随一の祭礼と称され、人々の篤い信仰を受けた「北野祭」を、歴史と伝統に則った往時の姿に再興する。

神仏習合と北野祭の歴史

御祭神菅公は御生前、天台座主十三世尊意和尚に師事し、仏教を学ばれた。仏教に深く精通され、特に天台密教を殊の外信仰されていたという史実は、菅公の御事跡を描く当宮所蔵国宝「北野天神縁起絵巻・承久本」に、菅公と天台宗や比叡山との御縁の一端が記されていることから明らかである。

天曆元年(九四七)に当宮が創建されて以降、北野の祠官(神社の祭礼や社務を行う者・現在で云う神主)は、明治初年まで僧職が務めており、寛弘元年(一〇〇四)比叡山延暦寺の僧であった是算が、菅原家の出生の御縁もあり、北野社の初代別当職に任じられ以来、師資相承し、延暦寺の下に曼殊院門跡が当宮の別当として社務を総括し、明治維新までのおよそ九百年間に亘り歴任するなど、両社寺は歴史的、信仰的に深い御神縁で結ばれているのである。

延暦寺に御鎮座する天神さま「登天天満宮」

比叡山に伝わる天神信仰として、尊意和尚を襲った菅公の霊に対して、かえって和尚の説法に心を悔い改めた懺悔した菅公は、将来自らが十一面観世音菩薩となり、祈願する者を災難から守護することを誓い、稲妻の如く白煙となって天に登ったとの伝説が残されている。比叡山延暦寺にはこの逸話より、登天天満宮が祀られており、天神信仰の崇拜が今も続いている。

当宮では、令和九年の半萬燈祭に向けて、旧儀・古儀の復興に取り組んでいるが、多彩な信仰形態を有する天神信仰の中でも、菅公慰霊のために営まれる御霊信仰から発生した「北野御霊会」は重要な儀式として、朝廷や公家、庶民に至るまで盛んに執り行われた。平安時代以降、時の移ろいの中で、様々な疫病や災いに見舞われてきた我が国において、人々がその厄災を鎮めるために神仏に祈りを捧げる信仰の姿は、混沌な現代社会においても、必要不可欠である。世界の安寧と人々の幸福を祈願するのはもちろんのこと、歴史を緋き、旧儀を復興し、北野天満宮と比叡山延暦寺の両社寺の千有余年に亘る信仰の更なる発揚のため、恒例行事として北野御霊会を斎行し、来たる半萬燈祭の盛儀に繋げていく。



北野祭ゆかりの八乙女舞



「北野祭瑞饋祭」祭礼行列



応仁の乱以来約550年ぶりに再興した北野御霊会(令和2年)

「令和の北野祭」の始まりの神事「北野御手洗祭」齋行

平安京から受け継がれる「御手洗川足つけ燈明神事」
◆令和六年八月二日から八月十八日
◆令和六年八月九日から八月十二日（四日間限定）
御神宝類の被い清めに由来「国宝御本殿石の間通り抜け神事」



菅公御歌「彦星の行あひを待つかささぎの渡せる橋をわれにかさなむ」

御祭神の菅原道真公と七夕との御神縁は深く、菅公御歌「彦星の行あひを待つかささぎの渡せる橋をわれにかさなむ」は、遠く九州大宰府の地へ左遷された菅公の失意の胸の内を、七夕ゆかりの織姫と牽牛の二星に想いを馳せ、天の川にかかる橋とされた「かささぎ」に望郷の念を重ねた七夕の御歌として有名である。

全国でも類を見ない、知られざる北野の重儀「御手洗祭」

当宮の御手洗祭は、全国でも類を見ない大変珍しい儀式であった。特に中世室町期における一連の御手洗神事は興味深い。

共立女子短期大学の菅野扶美教授によれば、当宮では、先ず七月六日に井戸浚え（井戸の清掃）をし、関伽井の水を汲み上げ、御神前で御手水として供えられることで御香水（神に供える神聖な水）を作り出す。その御香水は、御本殿の神仏（当時は神仏習合だった）に捧げられるほか、公方様（足利將軍家）をはじめ、曼殊院や当宮関係者にその日の内に配られた。その水を服せば、全身の穢れを祓い、すこやかな体が保たれると信仰されていた。

御手洗神事は前日から始まり、七日未明に精進潔斎した神職が内陣に入殿し、宝物の入った櫃より、手水盥・椀（水差し）・簀子等を取り出し、内々陣の前に、硯と硯箱、硯箱の蓋に重ね置かれた料紙五枚と、更にその上に梶の葉七枚も重ね、墨・筆も添えて棚にしつらえる。これら用意が整うと、内陣の一切の灯が消され、暁間の御本殿内陣で御手水神事が行われるのである。

次第書きによれば、御神水の入った椀から簀子をかけた手水盥へと水を注ぐことを七回行い、一回につき六度また七度に分けて注ぐとある。この御神前で、椀から手水盥へと水が注がれる過程が「御手水神事」という儀礼である。内陣には椀から注がれる水音が響くが、同時に、御祭神菅公作の漢詩と和歌を誦する「唱え言」を奏する。この唱え言を記した北野天満宮蔵「七夕御神事秘文」には、『北野天神縁起』中の天拜山で唱えたという七言絶句の偈と菅公作とされる和歌五首が記されているのである。

更に、芋の葉に置いた露を硯に入れ、その露の水で墨をよく磨って筆に付け、それらに件の料紙と梶の葉を添えて、内々陣の御簾を二十程ほど上げて中に差し入れたと伝わり、ここに北野の御手洗神事の真髓が表されているのである。

一つだけの信仰ではない、北野の七夕信仰

御心を寄せられた菅公の七夕信仰は、やがて天神信仰と深く結びつき、北野独自の信仰と伝播する。具体的には、「平安京の天門聖地北野に古来継承される被いと清めの信仰」「北極星瞬く星の信仰」「北野御手洗神事を縁とする水の信仰」「西陣の機織りによる棚機信仰」「七夕祈願に際する文筆上達を願う学業成就の信仰」などの様々な信仰に派生し、北野特有の神事形態に発展した。

古来、北方は北極星が瞬き、世界の中心・秩序を象徴する至上の地とされ、当宮が創建された平安京の北西（天門）北野の地は最も清浄の場所として、まさに神々の聖地、祭祀の場、遊興の場として認められた場所であった。

北野の空には北極星が瞬き、その土地の西には大嘗祭の祓えの儀式で用いられる「荒見川祓」の川として有名な紙屋川、東は御所の御用水とされた松葉川が流れ、清水で囲まれた聖地であり、大陸から伝播した七夕信仰が、北野の天神信仰と融合することで、朝廷をも認め信仰する我が国独自の七夕信仰の源流となった。

広辞苑に記される「御手洗祭・北野御手水神事」

御手洗祭は広辞苑に『京都の北野天満宮で七月七日に行う祭』と記される北野の重要神事。

古くは、北野の神事奉行を司る社家、松梅院が御内陣で御手水を献じたことにより「北野御手水」と称されている。

現在当宮神職により、旧暦七月七日（当宮では八月七日）、菅公御遺愛の松風の硯、水指、角盥に梶の葉を添えて、御手水が御神前に献じられ、祭典を執行し、七夕の歴史と伝統を象徴する行事として継承している。



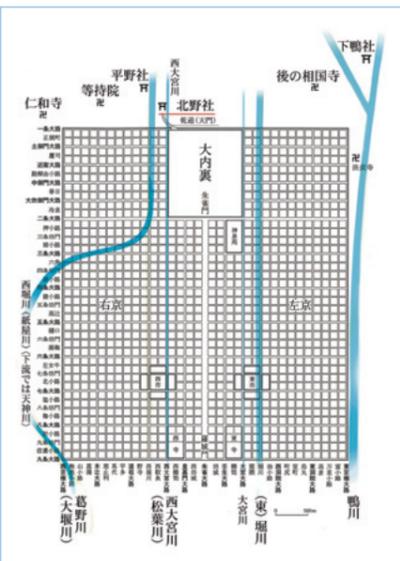
国宝御本殿石の間通り抜け神事



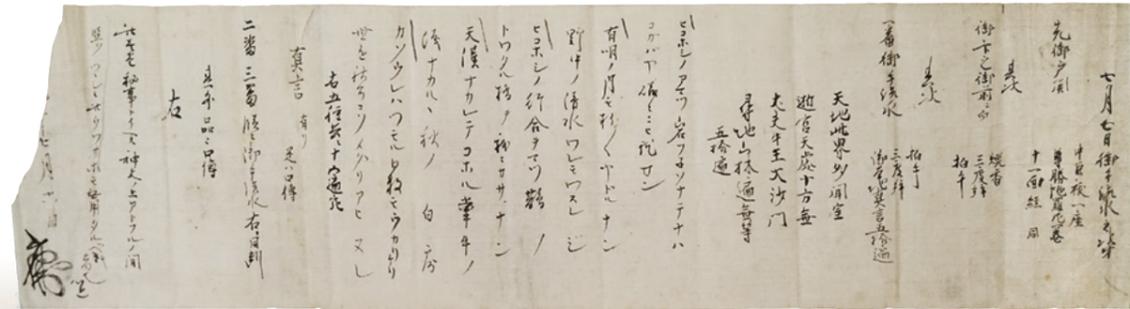
御手洗川足つけ燈明神事



境内七夕ライトアップ



当宮に遺る七夕秘文「御手水神事次第」唱え言も記されている



金蒔絵の角盥と梶の葉

天神様の大衆信仰

学問の神、そして至誠の神としての 天神様に寄せられる信仰

北野文化研究所 室長 松原 史

◆はじめに

令和九年に迎える菅公御神忌千二百二十五年半萬燈祭に向けて、当宮では現在様々な角度から天神信仰や御神宝に関して調査・研究を行っている。歴代の萬燈祭の折にも、天神様の御神徳や世の天神信仰に関して様々に検証されてきているが、皇室や武門からの崇敬が研究の中心となる場合が多く、市井の人々の間での天神信仰やそれまつわる美術品・書籍に関しては、前者と比べると、深く触れられることはあまりなかったように思われる。もちろん萬燈祭自体は、多くの人々―まさに大衆の参加（参拝や献灯など）により成り立っていたの言うまでもないことであるが、こうした多くの市井の人々による天神信仰の背景には、御神宝として御本殿や宝物殿に収蔵されるものとは別に、庶民によって享受されてきた天神美術や関連書籍の存在があった。

◆天神信仰の多様性と天神美術

畏れられる怨霊から都を守る善神―御霊へ

本号では、八月二日から十二日まで当宮文道会館ホールで「天神様の大衆信仰」展を開催するのに合わせ、朝野を問わず信仰を集めた天神様の「大衆信仰」にまつわるさまざまな美術品を紹介しつつ、天神様への信仰の多様性に関して改めてご紹介したい。

天神様は、現在でも学問の神、厄除の神などとして世に広く親しまれているが、歴史を緋けば、天神信仰の多面性には目を見張るものがある。才氣あふれる菅原道真公（菅公）を無実の罪で左遷したという後ろ暗い思いを持つ藤原氏や朝廷から、怨霊として畏れ奉られたところからはじまり、都を脅かすほどの強大な力は、やがて熱心な祈りにより都を守る皇城鎮護の神として善神御霊に転ずる。強大な怨霊を御霊として鎮めた北野天満宮は、平安京の北西を守る清め祓えの社として、朝廷から篤く崇敬されるとともに、都の西の遊行地として、多くの参詣者の往来する社となった。

を差し出した舎人の松王丸（三つ子の次男）の忠義、そして進んで身代わりとなった幼い小太郎の人情劇でもあり、涙無くしては見ることのできない大人気の演目となった。その人気の裏には、当時学問の神としてすでに庶民の間で知られ親しまれていた菅公が題材であること、また牛飼いであった松王丸、小太郎という庶民が、菅公の子息、すなわち貴人を守るという構成が、観覧者である市井の人々の心をうったこと、そして松王丸が実は藤原時平の舎人であり、敵方の家臣が菅公の子息を守るとい息を呑むような展開が用意されていたことなどが効果的に働いたためだと考えられる。

この「菅原伝授手習鑑」はのちに歌舞伎としても上演され、浄瑠璃が歌舞伎へと転用される先駆けとなった。

学問の神として天神様を知っていた庶民たちは、この「天神記」「菅原伝授手習鑑」を観劇することで、天神様の生涯や天神様を取り巻く忠義、忠孝などの人間模様を深く知っていくことになる。これらは現在も人気演目としてしばしば上演されており、学問の神、書道の神である菅公を描きつつ、忠義の物語として、また至誠の神としての要素も広く民衆に浸透させる契機となった作品であるといえる。

◆浮世絵に見る天神信仰

続いて浮世絵に見る天神信仰に関して見ていく。

月岡芳年 「天神記」てらこや（図1）
月岡芳年 「皇国二十四功 贈正一位 菅原道真公」（図2）



図1 「天神記」てらこや 月岡芳年 明治時代



図2 「皇国二十四功 贈正一位 菅原道真公」
月岡芳年 明治時代

学問の神

―詩歌の神、書道の神から寺子屋の学問の神へ―

また平安時代の早い段階で、菅公の詩歌の才にあやかりたいという信仰の萌芽が見られる。五歳で和歌を、十一歳で漢詩を詠み、中世においては和歌三神の一柱に数えられ、連歌の神としても崇敬をあつめた菅公。書の達人としても知られ、手習の上達を願う書道の神でもあった。

そうした学問・詩歌・書道の神としての信仰は、江戸時代、寺子屋が発展するに従い決定的なものとなる。寺子屋において、二十五日には床の間に天神様の軸をかけて天神様に手習、学問の上達を願う、天神講が行われるなど、庶民の間で学問の神としての天神様が確立されていた。

誠の神・至誠の神

―人形浄瑠璃・歌舞伎に見る忠義と勸善懲惡―

そして、寺子屋を媒介として培われた「学問の神」としての信仰とともに、浄瑠璃や歌舞伎といった娯楽の演目を媒介として色濃く浸透していったのが、忠義の神、誠の神、至誠の神としての天神様の姿である。

近松門左衛門（承応二年―享保九年・一六五三―一七二五）によって制作され、正徳四年（一七一四）に初演された人形浄瑠璃「天神記」には、菅公（菅原道真）が藤原時平に無実の罪を着せられ、左遷されて失意のうちに薨去され、のちに雷神となつて時平に仇討ちし、最後は神として北野天満宮に祀られるまでが描かれる。「渡唐天神」「柘榴天神」「綱敷天神」「飛梅伝説」など、天神信仰に欠かせない、絵画の主題としてもしばしば取り上げられてきた要素が散りばめられた誠に見事な作品となつている。

この「天神記」をもとにして、延享三年（一七四六）に初演されたのが浄瑠璃の「菅原伝授手習鑑」である。こちらは「天神記」を下書きにしつつ、当時天満で三つ子が生まれたという時事ネタを加えている。最もよく上演される四段目「寺子屋の段」では、菅丞相の息子、菅秀才の命を守り、身代わりとして自身の息子を最後の浮世絵師とも呼ばれる月岡芳年（天保十年―明治二十五年・一八三九―一八九二）も天神様の姿を描いた浮世絵師の一人である。こちらは先に触れた近松門左衛門作の「天神記」の寺子屋における手習シーンを描いたユーモラスな作品である。

また、日本の歴史上忠孝と称される人物であり、かつ芳年自身が感銘を受けた人物二十四名の姿を描いた「皇国二十四功」には、天拝山にて天に無実を訴える菅公の姿が、十六世紀にスペインで活躍したギリシャ人の画家エルグレコを彷彿とさせるような大変印象的な構成で描かれている。

歌川国貞 「天神記車引」（図3）
歌川国貞 「菅原伝授手習鑑」（図4）

主に明治に活躍した浮世絵師三代目歌川国貞（嘉永元年―大正九年・一八四八―一九二〇）による「天神記」車引の段の、藤原時平と三兄弟（梅王丸・松王丸・桜丸）を描いた役者絵である。明治の歌舞伎の黄金期を築いた「團菊左」（五代目尾上菊五郎、九代目市川團十郎、初代市川左團次）が揃い踏みで描かれている。



図3 「天神記」車引 歌舞伎絵 歌川国貞 明治時代



図4 「菅原伝授手習鑑」歌舞伎絵 歌川国貞 明治時代

同じく三代目歌川国貞によって描かれた「菅原伝授手習鑑」寺子屋の段の役者絵は、首実検を象徴するような赤い背景が印象的な作品となつている。人気の演目を花形役者が上演することで、「天神記」「菅原伝授手習鑑」の物語は、世の人々に広く知られることになった。そしてその場面を描いた浮世絵の流布により、さらに多くの人々へと天神様の物語が浸透していったのである。

◆ 萬燈祭の天神美術

明治維新を経て初めて大々的に行われた萬燈祭が、明治三十五年（一九〇二）の菅公御神忌一千年祭であった。当宮宝物殿には、一千年祭の折に京都画壇の絵師らによって奉納されたさまざまな絵画、和歌や漢詩、連歌などの献詠色紙が収蔵されているが、そうした芸術家らによる神社への奉納美術の他にも、市井にはさまざまな関連出版物が流布していた。

天満宮千年祭記念誌（図5） — 洛陽天満宮二十五社巡拝と御朱印めぐり —



図5 『天満宮千年祭記念誌』 明治35年（1902）

千年祭に際し発行された『天満宮千年祭記念誌』は、北野天満宮をはじめとする京都の天満宮・天神社の中でも最も菅公に縁の深い二十五社を取り上げて、写真入りで紹介した冊子である。この二十五社（時代により多少入れ替わりがあるが北野天満宮は必ず含まれている）を巡拝する「洛陽天満宮二十五社巡拝」は、江戸時代中期ごろから民間に流行した風習であったようである。表紙には、萬燈祭の象徴ともいえる灯明の灯りと、「宵の間や都のそらに住みもせで心づくしの有明の月」の和歌短冊が描かれている。本作には社印が押印されている様子も見られ、巡拝しつつ御朱印をあつめる「御朱印巡り」が当時から行われていた様子がうかがえる。

絵双六 — 冊子付録に、国民教化に、宣伝に、広く普及した絵双六 —

近代に入ると、印刷技術の進歩により、美麗な絵を描いたさまざまな絵双六が盛んに制作されるようになった。絵双六自体の歴史は古く、室町時代に遡る。浄土双六が最古とされており、江戸時代に道中双六、芝居双六などが

唱歌

— メロディにのせて菅公の御事跡が語られる —



図8 「菅公の歌」 明治35年（1902）

変わり種としてご紹介したいのが、近代ならではの「唱歌」に見る菅公である。その名もズバリ「菅公の歌」（図8）には、菅公の詠まれた漢詩や和歌を題材にした曲が多数掲載されている。表紙の絵はおそらく大宰府の庵にて恩賜の御衣を眺め物思いに耽っている場面であろう。

作曲者の小山作之助（文久三年—昭和二年・一八六四—一九二七）は「日本音楽教育の母」と謳われる人物で、音楽教育の傍ら自らも生涯一〇〇〇曲を超える唱歌・童謡・軍歌・校歌などを作曲したといわれる。「荒城の月」などで知られる作曲家瀧廉太郎も、小山の教え子の一人である。親しみやすい唱歌に菅公の様子が歌われることで、菅公の伝記が正しく年若い児童にまで

知られることとなった。

昭和四年（一九二九）に刊行された「唱歌 新教材 第四十四篇 菅公」（図9）は、大阪音楽学校が小学校の教材として作成した唱歌の譜面である。表紙には君子の花であり清廉潔白の象徴ともされる白梅が描かれている。唱歌「菅公」の歌詞には、七五調で菅公の生涯と高潔な人柄が歌い込まれている。（図10）

このように、菅公の御事跡をメロディーに乗せて、初等音楽教育において広めたということは、天神様の大衆信仰に大きく寄与するところであったことだろう。



図9 唱歌 新教材 第四十四「菅公」 昭和4年（1929）

登場した。当宮を含む全国や京都の名所を集めたものや、大自在天神、うし天神などさまざまな天神像を集めたものなど、天神様に関連する双六もさまざまに発行されている。これらは児童雑誌の付録として人気があり、また教化や宣伝にも効果的であったことから、当時欠かすことのできない情報伝達の媒体として需要があったようである。



図6 「聖跡二十五霊社順拝双六」 松浦竹四郎（武四郎）



図7 大阪毎日新聞版「天満宮二十五拜まはり双六」 明治35年（1902）

蝦夷地（北海道）探検の第一人者であり、浮世絵師としても活躍した松浦竹四郎（武四郎）（文化十五年—明治二十一年・一八一八—一八八八）が描いた「聖跡二十五霊社順拝双六」（図6）には、第二十五番目の上がりのマス（中央）に、当宮が描かれている。余談ではあるが、当宮には松浦竹四郎から大型の鏡「北方地図鏡」も奉納されている。

松浦の双六を参考にして、明治三十五年の萬燈祭の際に、大阪毎日新聞が発行した双六も発見されており、大きな祭典に際して新聞社が双六を発行し流通させるといことが、行われていたようである。（図7）なお大阪毎日新聞版では、当宮は一のスタート地点となっている。新聞には当時、千年祭の準備の内容や当日の様子が事細かに掲載されており、双六もその流れの中で発行されたものと思われる。

◆ おわりに 天神様の大衆信仰

— 朝野を問わず敬われた菅公 —

以上見てきたように、江戸時代から明治・大正・昭和に至るまで、世の人々の間に天神信仰を顕した絵画や芸能、出版物が広まった。全国約一万二千社に及ぶ天満宮・天神社の存在に加えて、こうした多くの美術や芸術によって、世の人々は天神様の存在と、天神様の物語を一層身近に感じたことであろう。浄瑠璃や歌舞伎など、庶民の娯楽に取り入れられた菅公の物語は、天神様が学問の神様であり和歌や書道の神であったことを自然と人々の間に浸透させ、貴人と庶民、主従を超えた忠孝の物語として人気を博した。

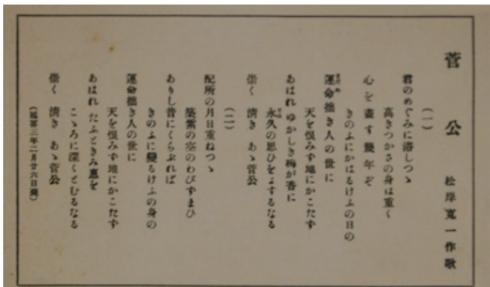


図10 唱歌「菅公」歌詞 菅公の一生と高潔な人柄が歌われている

また明治二十一年（二八八八）、歴史上の人物として初めて菅公の肖像が紙幣に採用され、のちに当宮の御本殿も採用されている。（図11）国の紙幣に採用し、初等教育の唱歌として菅公を用いるあたり、政府が、いかに菅公を重く用いていたかがうかがえる。まさに朝野を問わず、人気を博し敬われる存在であったといえる。他にも、ここでは紹介しきれなかったが、さまざまな市井の人々に流布した天神美術、書籍の数々をこの度の展覧会では公開している。天神信仰の広がりを感じていただければ幸いです。



図11 菅公と当宮御本殿が採用された紙幣

「天神様の大衆信仰」展

令和六年八月二日（金）～八月十八日（日）

時間 午前九時～午後八時

会場 文道会館ホール

拝観料 無料



天神さまと私

京都大学名誉教授
石川県立歴史博物館館長

藤井 讓治 さん



今号は、半世紀にわたって当宮に遺るおびただしい史料類を調査・研究され、『北野天満宮史料』として次々刊行される傍ら、当宮の文化活動に大きく寄与頂いている、京都大学名誉教授で石川県立歴史博物館館長の藤井讓治さんに登壇願ひ、古文書調査開始当初のことや今年新たに重文指定された聖廟法楽の和歌短冊のことなどについて宮司とご会談頂いた。
(構成・編集部)

宮司 忙しい仕事の間に縫って今も毎週一回来社され古文書調査をして頂いている姿には頭が下がります。また、様々な形でご教示頂いており、言葉では言い尽くせないほど感謝の気持ちで一杯です。天満宮の神職では、勤めて五十年になる私が一番の古株ですが、藤井先生は私より前から古文書調査をされていたと思いますので、もう半世紀以上にわたって天満宮にお見えになつていてと思います。まず先生が古文書調査に入られたきっかけなどをお聞きします。

― 史料の刊行は菅公御神忌千七十五年半萬燈祭の記念事業

藤井 『北野天満宮史料』の調査・刊行は、菅公御神忌千七十五年半萬燈祭の記念事業の一環だったようです。京大名誉教授だった小葉田淳先生（文化功労者）が、当時の香西大見宮司から「収蔵する古文書類を本にして将来に残したい」との依頼を受けて始まったんです。小葉田先生を頭に龍谷大の宗政五十緒先生（国文学）、立命館大の三浦圭一先生（中世史）、中世後期が専門の村田修三先生（後に大阪大学教授）、そして私が中世末から江戸時代を専門にしていました。小葉田先生は、私と同じ福井県の出身で、三回生の時、



当宮研究室にて

藤井 諸先生方の薫陶を受けながら私も仕事をさせて頂いたと思つています。こうして調べた北野さんの史料ですが、先生方が一つか二つは使われたかもしれませんが、直接自分の研究に使つて多くを書かれたことはありません。ただ、こうした史料集は他の人の研究に使つて頂くというのが一番の願ひです。ですからたとえば『目代日記』とか、すでに刊行されていた『社家日記』（竹内秀雄氏校訂の六巻、昭和四十八年発行）などは、この時期の研究者なら必ず使つて下さる貴重な史料です。私たちがやってきたことをあまり褒めるのもおかしいですが、みなさんに使つて頂

る史料集として生きていっていると思つています。

宮司 後世に残る立派な仕事、研究です。宮司も何人か変わり、平成になると藤井先生がキャップとなられて、調査メンバーも一新しますが、先生だけは最初から一貫して当宮の古文書類の調査に当たられています。半世紀にわたる調査・研究で感じられたことは？

藤井 中世末から近世初頭までの記録が『目代日記』と『社家日記』の二つに残っているのはすごいことです。同じことが違うように書かれており、それが確認できるということでも、すごく重要な史料群であると思つて思いました。古文書類は、北野天満宮というお宮の本体には江戸時代までは持つ主体がなかったのです。松梅院とか徳勝院といった、いわゆる祠官家、宮仕の各家、宮仕の集団の宮仕仲間、曼殊院から派遣されている目代が自分の政務のために持つていました。こうしたところにあつた記録が、近代になり神仏分離を機に、いろんな方の奉納によつてお宮に残され、それが今に伝来しているといつてもよいでしょう。その後も関係の史料が出た時、寄贈してもらえるものがあれば、そのように対応されてきたようです。

宮司 その言葉、私たちへの貴重な提言として受け止めさせて頂きます。

藤井 また、先般、権宮司さんが書架の奥から見つけられた北野の古今伝授に関わる史料、十分にまとまったものではありませんが、こうした発見も大事です。

― デジタルでもよいから公表してほしい未刊行史料

宮司 古文書の調査は一応完結したとみてよいでしょうか？

藤井 いえ、『宮仕記録』の刊行は、享保十年ぐらいまでです。それ以降百年分ぐらいが残っています。また、他にも近世の貴重な文書がたくさんあります。



それらを刊行するには、恐らくまだ二十年くらいかかるでしょう。それを私がやるというのではなく、「天満宮に遺つてきたものを将来に繋げる」という観点から、気長にやっていたら、長年調査に関わつてきた身としてはありがたいです。神戸淡路地震の時に東大地震研究所の先生がお見えになり、文政大地震の時の記録をご覧になりました。灯籠の倒れ方などから、その時の地震の震源地を推論する議論にも使われています。同様に様々な分野で研究者に使われている貴重な史料です。でも今の時代ですから、必ずしも本にする必要はなくデジタルで公表してもいいと思います。

宮司 その件、承りました。私はもう歳ですから次世代に繋いでいきたいと思つています。最近もつともうれしかったことは、聖廟法楽和歌の短冊類の重文指定です。これも藤井先生が京大の長谷川千尋先生と調査して下さつたお陰と感謝しています。記者会見の席で、先生が「短冊類はコヨリで束ねてあり、奉納されたまま誰も見ていなかったように思う」と、仰つた時には胸が熱くなりました。

藤井 みなさん、あれを発見と仰いますが、私自身は、発見とは言わないことになっています。あることはわかつていたが、位置づけが忘れられていたといえます。奉納された時、お宮の方はほとんど中を見ずに内陣に収められた。明治維新の時に国からの天皇の真筆類に関する調査などを受けていますから、これが天皇に関するものであることはお宮の方もわかつていた。しかし、宗祇以来の連歌会所が境内にあつたわけですから連歌のお宮さんだということで和歌の方に強い関心がいかなかったのだと思つています。しかし、元の姿を崩さずに伝来



天和3年(1683) 聖廟法楽和歌短冊と奉納箱

すると、これは稀有なことなんです。だから今回の調査で、江戸時代の天皇が古今伝授を受けた時に奉納されたものだ、という位置づけがぎゅゅと出て、重文に指定されたのです。

― 聖廟法楽和歌は、朝廷の北野社への位置づけの高さから

宮司 私は北野、住吉、玉津島という中世以来の和歌三神が江戸時代もずっと続いているものとはばかり思っていたんですが、和歌の世界では柿本社が入り北野が抜けていたんですね。それが先生らの調査で説が覆された……うれしいですね。

藤井 恐らく近代になっても、和歌三神は天神さんが外れると研究者もみんな思っていたでしょう。今回の短冊類の公開によってそれが書き換えられることになります。柿本社が和歌の神に加えられたのは江戸中期以降のこと。宮司

聖廟月次御法楽和歌 二巻と奉納箱



さんが言われるように朝廷では江戸時代もずっと天神さんは和歌の神として認識していたわけで、今回公開の史料が、近世の和歌史を研究する人にとって必ず北野さんの位置づけなくして書くことが出来なくなっただけだと思います。朝廷では毎月二十五日に聖廟法楽の和歌会を開くことが恒例化していました。聖廟というのは菅原道真公のことです。朝廷における北野社の位置づけは極めて高かったのです。

宮司 全国に一万社にも広がった天神信仰は庶民の信仰です。でもその一方で、当宮中庭には霊元天皇御奉納の石灯籠があり、三光門に架かる扁額の字は後西天皇の御

宸筆です。皇室とも繋がる御縁の深さは、やはり菅公の偉大さにあると思っっています。今、宝物殿で重文指定記念の聖廟法楽和歌集の公開を行っています。社報読者のために見どころを一言。

藤井 背景を一言で説明するのは難しいですが、ただ一つ、見てわかるのは奉納された奉納箱も一緒に重文に指定され、公開されていることです。朝廷から奉納された箱には何も書かないのが原則であり、そのありようがみてもらえます。これもお宮の方で外箱を作った遺されたが故に今の形で残ったといえます。

宮司 先生は、旧社報の時代から『歴史の一齣』という連載をされ、読者から好評を呼んでいます。

藤井 『歴史の一齣』は、当時社報で歴史の連載物をされていた浅井與四郎宮司（先々代宮司）が辞められた後、その後釜として始めたものです。今は三か月に一回ですが以前は毎月でしたので、結構きつかったです。もう百五十回ぐらいになるでしょうか。読んで頂ければ幸いです。

― 今後は連歌の調査に力を注ぎたい

宮司 先生は千七十五年半萬燈祭、また、千百年大萬燈祭も経験されています。千百年の時には、京都国立博物館などで開いた神宝展でも一方ならぬお世話になりました。二つの萬燈祭で何か記憶に残っていることはありますか？

藤井 千七十五年祭の時は、史料の解説に懸命でした。かつて小教院であった建物の小さな部屋でやっていたことをなつかしく思います。大萬燈祭は、遷宮のために仮殿が建てられました。その大きさに驚きました。

宮司 あと三年で千二百二十五年半萬燈祭を迎えます。そこに向けての先生の思

いをお伺いします。

藤井 萬燈というものは、単なるお祭りではなく多くの人から奉納を受けて、それを原資にして神社を修復して次の時代に受け継いでいくという大変重要な役割もありますので成功裏に終わられることを願っています。私自身の仕事としては、和歌短冊の重文指定ということで一つは果たさせて頂きました。今後は連歌の方も少し形がつくように調査を進めていきたい。和歌と連歌が終われば、ひたすら古文書読みです。

宮司 ありがとうございます。この社報は、修学旅行で当宮を訪れる全国の学校にも送っています。先ほどのお話しに出ましたように先生は福井県のご出身で京都大学で学ばれました。ご経歴はプロフィールの紹介欄に譲りますが、日本史を学ぼうと、思われたのはいつ頃ですか？ また、若者・子どもたちに向けてのメッセージを含めてお願いします。

― 若者に贈る言葉「自分がやりたいことを見つけること」

藤井 高校に入った時は理科系のクラスで、三年の一学期が終わった頃、文学部志望に気持ちが変わりました。明治維新に興味がありました。そして京大に入ってから曲折があり、近世・江戸時代を学ぼうと思っただけの三回生の頃です。小葉田先生のお弟子さんの朝尾直弘先生（後の文化功労者）に学んだからです。そしてドクターコースに入った頃、この道しかない、やっとながら決まりました。『岩波講座』（岩波書店出版の専門家執筆の叢書シリーズ）の近世に執筆させてもらったのも大きかったです。私が一番若かったと思います。『岩波講座』は、二十五年に一度ぐらい刊行されますが、次の講座にも参加させてもらい、数年前には編集委員として関わらせて頂きました。私自身は、あつちに行ったり、こつちへ行ったりの決して誇るような軌跡ではありません。でも、



北野天満宮史料はじめ藤井先生が関わられた刊行物（一部）

この道を選んだのは、そして続けてこられたのは、やっぱり面白いと思ったからだと思っっています。若い人たちには自分がやりたいことをうまく見つけることが大切だと言っておきます。やることを見つければ、その後の選択もできます。これはということ、高校生ぐらいの時に見出せるといいな、と思っっています。

宮司 若者たちへの素晴らしいメッセージ、ありがとうございます。

▼ 藤井先生が関わられた当宮の刊行物

- 『北野天満宮史料』
- ▼『目次日記』（昭和五十年）▼『古文書』（昭和五十三年）▼『古記録』（昭和五十五年）
- ▼『宮仕記録』（昭和五十六年）▼『目次記録』（昭和五十九年）
- ▼『宮仕記録 続1』（平成八年）▼『宮仕記録 続2』（平成九年）
- ▼『宮仕記録 続3』（平成十一年）▼『遷宮記録 1』（平成十二年）
- ▼『遷宮記録 2』（平成十三年）▼『遷宮記録 3』（平成十五年）
- ▼『年行事帳』（平成十六年）
- ▼『宮仕記録 続4』（平成十九年）▼『宮仕記録 続5』（平成二十二年）
- ▼『北野天満宮御土居関係資料』（平成二十六年）
- ▼『北野天満宮和漢籍目録』（平成二年）▼『聖廟法楽和歌集』（令和五年）

藤井 讓治（ふじい じょうじ）氏略歴

- 昭和二十二年 福井県生
- 昭和四十五年 京都大学文学部卒業
- 昭和五十年 京都大学大学院文学研究科博士課程単位修得
- 昭和五十年 京都大学文学部助手
- 昭和五十四年 神戸大学文学部助教授
- 昭和五十八年 京都大学人文科学研究所助教授
- 昭和六十年 ハーヴァード・イェンチェン研究所の客員研究員（一年）
- 平成 六年 京都大学文学部助教授
- 平成 七年 京都大学文学部教授
- 平成 八年 京都大学大学院文学研究科教授
- 平成 十六年 京都大学大学院文学研究科科長・文学部長（平成十八年三月まで）
- 平成 十六年 京都大学文学書館館長（平成二十四年三月まで）
- 平成 十七年 日本学術会議会員（平成二十三年九月まで）
- 平成 十七年 京都大学図書機構長・附属図書館長（平成二十三年まで）
- 平成 十七年 日本学術会議連携会員（平成二十三年まで）
- 平成 二十四年 京都大学定年退職、京都大学名誉教授
- 平成 二十五年 石川県立歴史博物館館長（現在に至る）



藤井先生が文化財指定に携われた重要文化財『北野西京神人文書』（平成二十六年三月指定）

史跡御土居の「青もみじ」公開、今年も賑わう

コロナ明け二年目、目立った外国人入苑者 朱色のうぐいす橋とのコントラストに感嘆

管公
御歌

このたびは幣もとりあへず手向山
紅葉の錦神のまにまに



新緑の青もみじと国宝御本殿



鮮やかな山吹の花と新緑の青もみじ

史跡御土居「もみじ苑」の青もみじの公開が今年も四月六日から六月三十日まで行われた。新型コロナウイルス感染症が季節性インフルエンザ並みに下がって二年目となり、一年目の昨年を上回る入苑者数となる賑わいを見せた。とくに今年は歴史的な円安となりインバウンドの外国人の姿が連日多数見られ、国際色豊かな青もみじ公開となった。

境内には豊臣秀吉公が天正十九年（一五九二）に築いた御土居の一部が残り、約三百五十本のもみじがあることなどから史跡御土居「もみじ苑」として公開している。市内有数のもみじの名所として、色づきが楽しめる秋と梅苑開苑中に限って公開してきたが、「せっかく、天満宮に参拝したのに御土居が閉まっており残念。他の季節にも開けてほしい」という観光客らの要望が年々強まり、平成二十七年からもみじの若葉が美しい春から初夏にかけての「青もみじ」公開をしている。

「青もみじ」を愛でるのは、今に始まったことではない。鎌倉時代末期から南北朝時代を生きた『徒然草』の作者・兼好法師も「卯月ばかりの若楓、すべてよろずの花紅葉にもまさりてめでたきものなり」（百三十九段）と、その美しさを称えている。

当宮の青もみじの公開は、市内でも少ない御土居の中であって、人気は年々高まっている。令和二年、三年とコロナ禍で公開が見送られ、一昨年、コロナ禍の落ち着きとともに三年ぶりに開苑するや初公開以来の人気ぶりを見せた。今年も新型コロナウイルス感染症が五類に下がって二年目となり、一年目の昨年を上回る賑わいとなった。また、梅雨入りが平年より二週間も遅くなったこともあって、ゴールデンウィーク中のみならず土日を中心に入苑者で賑わいを見せ、四月二十七日から五月六日までライトアップ期間中は、昼も夜も活況を呈した。



青もみじに合わせ、花手水も鮮やかに展示

今年とくに目立ったのは、欧米を中心とする外国人の姿。円安を如実に反映したインバウンドによるもので、朱色のうぐいす橋と青いもみじのコントラストに感嘆の声が上がり、絶好の撮影スポットとして人気を博していた。

初公開！青もみじ、ライトアップ

これまで秋のみみじ苑でのみ御土居のライトアップは行っていたが、今年初めて青もみじをライトアップし夜間特別公開としてゴールデンウィーク期間に限り公開した。

今回のライトアップに合わせ、御土居内の照明器具も一部新たに増設し、最新技術を用いたLED照明を使用することにより、昼間とはまた違ったより一層美しく幻想的な青もみじ苑を演出した。



青もみじライトアップ

入苑者からは「ナイターの青もみじの観賞は特別な風情を感じます」「ライトアップされた青もみじがすごく瑞々しくてきれい」などの感想が聞かれた。

青もみじライトアップ初日

京都三大学合同交響楽団のアンサンブルコンサート開く



京都三大学（京都工芸繊維大学・京都府立大学・京都府立医科大学）合同交響楽団のアンサンブルコンサートが四月二十七日夕、史跡御土居内の舞台で行われた。

バイオリン二人、ビオラ、チェロ各一人、計四人によるコンサートで、ベートーベンやシューベルト、モーツァルトといったクラシック四曲を演奏後、ジブリアニメ作品の『魔女の宅急便』や『上を向いて歩こう』といったおなじみのポピュラーな曲も披露した。

この日は、青もみじのライトアップ初日。舞台にはかがり火もたかれるという幽玄な雰囲気の中でコンサートで、薄暮の御土居に流れる弦楽の調べが、青もみじ観賞者の耳を楽しませた。

ゴールデンウィークの賑わいの中、北野天神太鼓会が一の鳥居で太鼓奉納

神若会北野天神太鼓会が五月三日午後一時半より境内一の鳥居前で、恒例の青もみじ太鼓を盛大に披露した。毎年、観光客で賑わうゴールデンウィーク期間の一日を「青もみじ太鼓」と題して、神社青年会である神若会が行なっている奉納行事で、今回は十五人の若衆が、『山呼』『三宅』『一心』などのお馴染みの曲に加え、新曲の『春風』など十曲を演奏した。

今年に入り、京都に観光で訪れる外国人観光客が急増する中、今回の天神太鼓の演奏の聴衆も半数は海外の観光客で、思わぬ日本の伝統芸能の披露に感激している様子で、太鼓演奏に聴き入っていた。

澄み渡るような青空のなか、響き渡る和太鼓の音色に、地域の方々も足を運び、演奏は大いに盛り上がった。



第七回 北野天神泣き相撲

百名の参加者に会場満員御礼!!



元気な泣きっぷりで健康祈願

子どもの日の五月五日、文道会館で「第七回北野天神泣き相撲」を開いた。参加者が百人を越す大人数となつたため、赤ちゃんの負担を考慮して初めて午前と午後二回に分けての開催となり、会場内は終日、

元気のよい赤ちゃんの泣き声が響きわたった。当宮と相撲の御縁は、菅公の十九代前の先祖が「相撲の祖」と讃えられる野見宿禰公であり、境内に末社としても祀られ、相撲にも霊験あらたかな神社として信仰されている。そうした御祭神菅公と相撲との深い御神縁から、二十五年毎の式年大祭「萬燈祭」では横綱の土俵入りが奉納されている。「泣いたら勝ち!」をフレーズに、天神さまの御加護で知恵を授かり、元気で明るく育ってほしいという願いを込めた「泣き相撲」は、平成二十七年から



満員御礼の会場

「はっけよい!」の奉行の掛け声で睨めっこ。すぐに泣き出す子もいれば、全然泣かない子もあり、土俵の周囲は大人の爆笑と赤ちゃんの泣き声に包まれた。泣きつ



京都両洋高等学校女子相撲部による四股踏み

額に鉢巻を締め、裸に化粧まわしをつけた赤ちゃんが両親らに抱かれて土俵上に登場し、

始まった。コロナ禍で休場が続き、四年ぶりに再開した昨年の第六回では、鳥羽高校出身の人気力士宇良関が姿を見せ、赤ちゃん力士に声援をおくった。今回は午前場所の開会式で宮司が、当宮と相撲との御神縁について語り、「元気に泣いて丈夫な子に育って下さることを願っています」と挨拶。京都府相撲連盟の平塚靖規会長も、「この催しを通じ相撲に関心を抱いて頂ければうれし」と述べられた。



〈午後の部〉

横綱 大関 明大 花村 咲生 舞花 舞生 舞花 舞生 舞花

午後の場所では、開会式には松井孝治京都市長も駆けつけ「子どもたちが元気に夏本番を迎えられるよう祈っています」と挨拶された。「勝敗なんて二の次。これで子どもが元気に育つでしょう」と、取り組みを終えた我が子を抱きながらうれしそうに話す母親の姿もあった。

この日、土俵が上がった赤ちゃんは、京都はもとより関西一円、遠く東京からの参加もあり、当宮泣き相撲の人気の高さがうかがえた。



〈午前の部〉

横綱 大関 筒井 博都 博都 博都 博都 博都 博都 博都

ぶりによって横綱や大関・関脇などが決まった。合間には、単独の女子相撲部としては全国唯一の高校である京都両洋高校の女子相撲部員五人が四股の踏み方を見せるパフォーマンスが披露され観客を大いに賑わせた。また、花店経営の崇敬会北野神興会・北野祭保存会の井上経和会長が「ぎょうは子どもの日です。菖蒲湯をどうぞ」と参加者全員に草菖蒲をプレゼントするサプライズも行われ、大いに盛り上がった。

北野右近の馬場駐車場にスーパーカー集結

オーナーら昇殿参拝し交通安全の祈願 上京警察署も協力して地域の交通安全啓発



およそ70台ものスーパーカーが北野の馬場に集結



北野天神太鼓会による和太鼓奉納

ファンだけでなく青もみじ参拝者も足を止めて見るなど賑わった。

「KYOTO スポーツカー・ヘリテージ・ギャザリング&パレード」という催し。御祭神の天神さまのお使いがランボルギーニのエンブレムと同じ「牛」という御縁があり、自動車評論家の西川淳氏らスーパーカー愛好家らによって八年前から実施している。こうした経緯から、例年ランボルギーニの参加台数が圧倒的に多いが、今年はフェラーリの本格的な生産が始まって半世紀を記念して、テーマを「ベルリネッタボクサー」とテス

ランボルギーニやフェラーリを始めとするスーパーカー約七十台が五月十二日、当宮右近の馬場の駐車場に集結、オーナーらが昇殿参拝して交通安全を祈るとともに愛車展示を行い、名車

タロツサの二十年」としたため、七十台の参加台数のうち四十台がフェラーリとなった。各車オーナーは、昇殿参拝し無事故を祈願した後、駐車場で参加車両の清祓を受けた。さながら豪華車両の展示会場となった右近の馬場は、平安初期に開かれた日本最初の競馬場で、その名は歴史書や当時の文学作品にも登場する馬に御縁のあるところ。「跳ね馬」のエンブレムのフェラーリが五月の空に映えわたり、ランボルギーニやポルシェなどなど居並ぶスーパーカーが多くのファンの目を引き付けていた。

文道会館前で、神若会北野天神太鼓会が恒例となっている太鼓演奏を奉納して催しを盛り上げた後、この日の主役ともなっているフェラーリだけに限定した交通安全啓発パレードを行った。西川さんは「三年後の御神忌千二百二十五年半萬燈祭に向け、さらに充実した催しにしていきたい」と、話されていた。

この日、参加車両のオーナーらに対し能登半島地震被災地への義捐金募金が行われ、集まったお金は同募金活動展開中の当宮に寄託された。



能登半島地震で被災した神社へのチャリティー義捐金も寄託

コロナ禍前の賑わい、取り戻す



修学旅行生の昇殿参拝活況、 祈禱を待つ生徒の弾んだ声、境内にこだます



学生の賑わい戻る境内

「志望校へ合格できますように」「学力が向上しますように」など、天神さまのご加護を祈る修学旅行生の昇殿参拝が、今年も四月上旬から七月中旬にかけて多く、御本殿前は連日活況を呈した。

新型コロナウイルス感染症が季節性インフルエンザと同等に扱われるようになって二年目、修学旅行参拝の中学生らのは、マスクをかけておらず、昇殿を待つ中学生らの弾んだ声がこだました。

修学旅行生の聖地として、毎年全国各地から小・中・高等学校が当宮に訪れるが、それも単なる観光ではなく、クラス毎に御本殿に昇殿参拝をして、学業成就や入試合格を天神さまに祈るのが、学問の神様たる当宮の特徴。春と秋を中心に、およそ三十万人の修学旅行生が参拝に訪れる。ところが、

新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、令和二年、三年と参拝はほぼ中止となり、令和四年になり、感染の落ち着きと共にようやく昇殿参拝が戻りはじめ、昨年からはコロナ禍以前の勢いに近づいてきた。

今年の修学旅行生の来宮は、例年通り二月から始まったが、四月以降の昇殿参拝数は、四月二十九校（二百五十七クラス）、五月二十九校（七百十九クラス）、六月二十九校（四百五十五クラス）、七月三十一校（七十八クラス）と

なり、大賑わいだったコロナ禍前の令和元年の数の八〇パーセントまで回復。とくに五月十六日は、六十三クラスの昇殿参拝数があり、境内は修学旅行生で溢れた。

修学旅行生は、関東方面からが圧倒的に多く全国に及ぶが、七月には今年初めて中国・北京の学校からの昇殿参拝も入るなど、海外の修学旅行生も訪れた。

京都には巡る名所旧跡が多いため、当宮での滞在時間には限りがあるが、短い時間の中でも、宝物殿に入館し、名宝に触れ、当宮の勉強をする学校もあった。境内で人気の水占みくじに興ずる中学生たちは、コロナ禍以前の賑わいを彷彿とさせる姿であった。



修学旅行参拝者数

（令和六年二月一日～七月十五日）但し、お申し出を頂いた数

月	昇殿参拝	自由参拝	合計
二月	九校	自由参拝	六七校
三月	七校	自由参拝	二二校
四月	二九校	自由参拝	二四三校
五月	二七九校	自由参拝	四九三校
六月	一九五校	自由参拝	三四五校
七月	三一校	自由参拝	五一校
合計	六五〇校	自由参拝	一一二〇校

此の度の参拝を心の支えとされ、
また天神さまの御加護によりご祈願の成就をお祈り申し上げます。

修学旅行特別昇殿参拝学校一覧（順不同）

県	学校名	クラス数	参拝者数	参拝方法	クラス数	
●岩手県	日立市立久慈中学校	3	3	自由参拝	3	
	ひたちなか市立勝田第二中学校	3	3	自由参拝	3	
	ひたちなか市立勝田第三中学校	4	4	自由参拝	4	
	阿見町立竹来中学校	2	2	自由参拝	2	
	稲敷市立江戸崎中学校	3	3	自由参拝	3	
	茨城県立茨城学園	1	1	自由参拝	1	
	茨城町立青葉中学校	3	3	自由参拝	3	
	笠間市立岩間中学校	3	3	自由参拝	3	
	笠間市立友部第二中学校	4	4	自由参拝	4	
	笠間市立友部中学校	5	5	自由参拝	5	
	結城市立結城東中学校	4	4	自由参拝	4	
	結城市立結城南中学校	3	3	自由参拝	3	
	高萩市立松岡中学校	2	2	自由参拝	2	
	桜川市立大和中学校	2	2	自由参拝	2	
	鹿嶋市立高松中学校	1	1	自由参拝	1	
●山形県	取手市立藤代南中学校	4	4	自由参拝	4	
	小美玉市立小川南中学校	3	3	自由参拝	3	
	小美玉市立美野里中学校	1	1	自由参拝	1	
	城下町立桂中学校	1	1	自由参拝	1	
	城下町立常北中学校	3	3	自由参拝	3	
	常陸太田市立水府中学校	1	1	自由参拝	1	
	常陸太田市立瑞竜中学校	2	2	自由参拝	2	
	常陸太田市立里美中学校	1	1	自由参拝	1	
	常陸大宮市立大宮中学校	2	2	自由参拝	2	
	水戸市立国田義務教育学校	1	1	自由参拝	1	
	水戸市立石川中学校	2	2	自由参拝	2	
	水戸市立第一中学校	1	1	自由参拝	1	
	水戸市立第二中学校	1	1	自由参拝	1	
	水戸市立第三中学校	4	4	自由参拝	4	
	●茨城県	水戸市立立花中学校	4	4	自由参拝	4
水戸市立第五中学校		4	4	自由参拝	4	
水戸市立内原中学校		4	4	自由参拝	4	
水戸市立飯富中学校		1	1	自由参拝	1	
水戸市立緑岡中学校		5	5	自由参拝	5	
石岡市立園部中学校		2	2	自由参拝	2	
大洗町立南中学校		1	1	自由参拝	1	
筑西市立下館中学校		3	3	自由参拝	3	
●栃木県		真岡市立久下田中学校	3	3	自由参拝	3
		真岡市立真岡西中学校	1	1	自由参拝	1
		真岡市立真岡東中学校	1	1	自由参拝	1
		真岡市立長沼中学校	1	1	自由参拝	1
		真岡市立物部中学校	1	1	自由参拝	1
		壬生町立壬生中学校	1	1	自由参拝	1
		壬生町立南大飼中学校	1	1	自由参拝	1
	足利市立協和中学校	2	2	自由参拝	2	
	大田原市立湯津上中学校	1	1	自由参拝	1	
	栃木市立寺尾中学校	1	1	自由参拝	1	
	栃木市立吹上中学校	3	3	自由参拝	3	
	栃木市立大平中学校	4	4	自由参拝	4	
	栃木市立都賀中学校	3	3	自由参拝	3	
	栃木市立東陽中学校	5	5	自由参拝	5	
	那珂川町立馬頭中学校	2	2	自由参拝	2	
●群馬県	みどり市立笠懸南中学校	3	3	自由参拝	3	
	みどり市立笠懸南中学校	2	2	自由参拝	2	
	安中市立第一中学校	4	4	自由参拝	4	
	安中市立第二中学校	2	2	自由参拝	2	
	玉村町立南中学校	1	1	自由参拝	1	
	桐生市立桜木中学校	1	1	自由参拝	1	
	桐生市立川内中学校	1	1	自由参拝	1	
	桐生市立相生中学校	2	2	自由参拝	2	
	桐生市立中央中学校	3	3	自由参拝	3	
	高崎市立高松中学校	1	1	自由参拝	1	
	高崎市立新町中学校	3	3	自由参拝	3	
	高崎市立倉賀野中学校	2	2	自由参拝	2	
	高崎市立中尾中学校	1	1	自由参拝	1	
	高崎市立長野郷中学校	3	3	自由参拝	3	
	渋川市立北橋中学校	1	1	自由参拝	1	
●群馬県	昭和村立昭和中学校	2	2	自由参拝	2	
	沼田市立沼田中学校	3	3	自由参拝	3	
	沼田市立多那那中学校	1	1	自由参拝	1	
	沼田市立池田中学校	1	1	自由参拝	1	
	沼田市立白沢中学校	1	1	自由参拝	1	
	沼田市立鎌倉中学校	2	2	自由参拝	2	
	前橋市立元総社中学校	1	1	自由参拝	1	
	前橋市立第一中学校	1	1	自由参拝	1	
	前橋市立第五中学校	2	2	自由参拝	2	
	前橋市立第六中学校	1	1	自由参拝	1	
	前橋市立第七中学校	1	1	自由参拝	1	
	前橋市立東中学校	4	4	自由参拝	4	
	太田市立旭中学校	1	1	自由参拝	1	
	太田市立強戸中学校	1	1	自由参拝	1	
	太田市立城東中学校	1	1	自由参拝	1	
太田市立西中学校	3	3	自由参拝	3		
太田市立南中学校	3	3	自由参拝	3		
太田市立尾島中学校	3	3	自由参拝	3		
大泉町立南中学校	2	2	自由参拝	2		
嬭恋村立嬭恋中学校	2	2	自由参拝	2		
富岡市立北中学校	1	1	自由参拝	1		
明和町立明和中学校	1	1	自由参拝	1		



松本市立山辺中学校	3クラス
松本市立女鳥羽中学校	2クラス
松本市立松島中学校	2クラス
松本市立信明中学校	2クラス
松本市立菅野中学校	1クラス
松本市立清水中学校	2クラス
松本市立波田中学校	1クラス
上田市立塩田中学校	2クラス
上田市立丸北中学校	3クラス
上田市立第一中学校	1クラス
上田市立第二中学校	2クラス
上田市立第五中学校	3クラス
上田市立第六中学校	1クラス
信州大学教育学部附属松本中学校	1クラス
信濃町立信濃小中学校	1クラス
諏訪市立諏訪西中学校	1クラス
諏訪市立諏訪中学校	1クラス
須坂市立諏訪中学校	1クラス
須坂市立常盤中学校	1クラス
須坂市立墨坂中学校	2クラス
千曲市立戸倉上山田中学校	1クラス
千曲市立更埴西中学校	1クラス
千曲市立埴生中学校	1クラス
川上村立川上中学校	1クラス
組合立依田窪南中学校	2クラス
辰野町立辰野中学校	1クラス
池田町立高瀬中学校	2クラス
中川村立中川中学校	1クラス
中野市立南宮中学校	3クラス
中野市立豊田中学校	1クラス
長野市立広徳中学校	3クラス
長野市立厚陵中学校	1クラス
長野市立篠ノ井西中学校	3クラス
長野市立篠ノ井東中学校	4クラス
長野市立堀花中学校	4クラス
長野市立西部中学校	1クラス
長野市立川中島中学校	3クラス
長野市立東北中学校	4クラス
長野市立柳町中学校	2クラス
東御市立東部中学校	3クラス

東御市立北御牧中学校	1クラス
南木曾村立南木曾中学校	1クラス
飯綱町立飯綱中学校	3クラス
飯山市立城南中学校	1クラス
飯山市立城北中学校	1クラス
飯山市立遠山中学校	1クラス
飯山市立高陵中学校	2クラス
飯田市立波田中学校	3クラス
飯田市立鼎中学校	1クラス
飯田市立飯田東中学校	1クラス
飯田市立緑ヶ丘中学校	1クラス
飯島町立飯島中学校	1クラス
豊丘村立豊丘中学校	1クラス
箕輪町立箕輪中学校	1クラス
野沢温泉村立野沢温泉中学校	1クラス
立科町立立科中学校	2クラス
南箕輪村立南箕輪中学校	1クラス
須坂市立相森中学校	1クラス
須坂市立三陽中学校	2クラス
飯田市立竜峽中学校	2クラス



伊豆の国市立葦山中学校	5クラス
伊豆市立中伊豆中学校	1クラス
伊豆市立土肥小中一貫校	1クラス
掛川市立東中学校	2クラス
菊川市立菊川西中学校	4クラス
御殿場市立原里中学校	4クラス
御殿場市立御殿場中学校	7クラス
御殿場市立高根中学校	2クラス
御殿場市立西中学校	3クラス
三島市立南中学校	5クラス
三島市立北上中学校	5クラス
三島市立北中学校	1クラス
小山町立須走中学校	1クラス
小山町立北郷中学校	2クラス
沼津市立愛鷹中学校	2クラス
沼津市立金岡中学校	2クラス
沼津市立原中学校	3クラス
沼津市立戸田小中一貫学校	1クラス
沼津市立今沢中学校	3クラス
沼津市立大岡中学校	4クラス
沼津市立大平中学校	1クラス
沼津市立第一中学校	3クラス
沼津市立第二中学校	1クラス
沼津市立第三中学校	1クラス
沼津市立第四中学校	1クラス
沼津市立第五中学校	3クラス
沼津市立長井崎小中一貫学校	1クラス
沼津市立浮島中学校	2クラス
焼津市立港中学校	2クラス
焼津市立焼津中学校	3クラス
焼津市立東益津中学校	3クラス
清水町立南中学校	1クラス
静岡市立清水第一中学校	3クラス
静岡市立清水第五中学校	2クラス
静岡市立清水第六中学校	5クラス

静岡市立東豊田中学校	1クラス
静岡市立美和中学校	3クラス
静岡市立服織中学校	3クラス
静岡市立籠上中学校	3クラス
静岡市立賤機中学校	1クラス
袋井市立周南中学校	1クラス
袋井市立袋井中学校	1クラス
長泉町立長泉中学校	7クラス
長泉町立北中学校	1クラス
島田市立金谷中学校	5クラス
藤枝市立岡部中学校	1クラス
藤枝市立西益津中学校	3クラス
藤枝市立大洲中学校	3クラス
藤枝市立藤枝中学校	1クラス
函南町立東中学校	5クラス
函南町立函南中学校	3クラス
磐田市立城山中学校	1クラス
磐田市立南部中学校	1クラス
磐田市立磐田第一中学校	5クラス
磐田市立豊田中学校	1クラス
浜松市立可美中学校	1クラス
浜松市立光が丘中学校	2クラス
浜松中部学園	2クラス
富士宮市立西富士中学校	1クラス
富士宮市立大富士中学校	5クラス
富士宮市立富士宮第一中学校	6クラス
富士宮市立富士宮第二中学校	3クラス
富士宮市立富士宮第三中学校	4クラス
富士宮市立富士宮第四中学校	5クラス
富士宮市立富士根南中学校	6クラス
富士宮市立北山中学校	4クラス
富士見町立富士見中学校	1クラス
富士市立岳陽中学校	8クラス
富士市立岩松中学校	4クラス
富士市立吉原第一中学校	3クラス
富士市立吉原第二中学校	3クラス
富士市立吉原第三中学校	1クラス
富士市立吉原北中学校	3クラス
富士市立元吉原中学校	2クラス
富士市立須津中学校	3クラス

富士市立大淵中学校	3クラス
富士市立鷹岡中学校	4クラス
富士市立田子浦中学校	4クラス
富士市立富士川第一中学校	2クラス
富士市立富士川第二中学校	2クラス
富士市立富士土中学校	4クラス
富士市立富士土南中学校	2クラス
裾野市立東中学校	2クラス
●愛知県	
名古屋経済大学高蔵高等学校	3クラス
●三重県	
学校法人古川学園古川学園中学校	1クラス
●大阪府	
大阪府立富田林高等学校	1クラス
●兵庫県	
芦屋学園高等学校	3クラス
雲雀丘学園高等学校	8クラス
神戸星城高等学校	1クラス
朝来市立中川小学校	1クラス
兵庫県立明石高等学校	8クラス
●和歌山県	
開智高等学校	5クラス
開智高等学校中部	4クラス
●鳥取県	
鳥取市立北中学校	4クラス
●徳島県	
徳島県立城南高等学校	1クラス
●佐賀県	
嬉野市立大野原中学校	1クラス
●中華人民共和国	
成都立格実験学校	1クラス

北野の光

斎行された祭典・行事
《四月～六月》

茶祖は江戸期の賣茶翁 賣茶本流の献茶式を齋行

江戸中期、賣茶翁の異名で知られた高遊外を茶祖とする煎茶道賣茶本流献茶式を、四月十四日午前十時から御本殿で齋行した。同流の献茶式は昭和二十七年以来、毎年行われており、渡邊琢祥宗匠を始め一門の人が参列。お祓いの後、渡邊宗匠が煎茶を点てられ、献上された御神前において齋主が祝詞奏上、宗匠を始め一門の代表が玉串拝礼して同流の発展を祈願した。式典の後、明月舎に茶席が設けられ、一門の人たちが煎茶を楽しんだ。



明祭（中祭）を齋行 御神前に無実の喜びを奉告



官公の冤罪が晴れた日に当たる四月二十日の午前十時から御本殿で中祭の明祭を齋行し、御神前に無実の喜びを奉告した。
昌泰四年（九〇一）正月、従二位右大臣の位にあった菅公は、左大臣藤原時平の讒言によって無実の罪を着せられ、九州・大宰府に^{ださいのふのさち}大宰権帥として配流され、二年後の延喜三年（九〇三）二月二十五日、失意のうちに薨去された。しかし、二十年後の延長元年（九二二）四月二十日、冤罪は晴れて右大臣に復され、位も一階級上げて正二位に昇進、左降の文書は、直ちに焼却されたので、この日を菅公の冤罪が晴れた日としている。
なお、朝廷はその後も正歴四年（九九三）六月に菅公を正一位に叙し、さらに同年閏十月には、人臣としては最高位の太政大臣の位を追贈している。

十五万枚の参拝者の願いを焚き上げ 祈願絵馬焼納式を齋行



昨年度一年間に入試合格・学業向上・無病息災・災難厄除けなど、様々な願いを込めて奉納された絵馬や割符を焚き上げ、願掛けされた参拝者の諸願成就を祈願する祈願絵馬焼納式を四月四日午前十時から境内中ノ森広場で齋行した。
新年度の恒例行事で、奉納された絵馬や割符は、コロナ明けによって増えた参拝者数に比例して約十五万枚と大幅に増加した。忌竹にしめ縄を張り巡らした斎場に奉納された絵馬や割符がうず高く積み上げられ、齋主が祝詞奏上した後、御本殿において火打ち石で鑽り出した浄火を付け木に移して絵馬に点火すると、音を立てて勢いよく燃え上がった。
焚き上げは午前と午後、二回にわたって行われたが、焚き上げの間は神職が交代で大祓詞を奏上し、奉納者の願いがかなうように祈った。
斎場は、表参道からよく見えるため、参拝者が次々に足を止めて見守り、大祓詞を奏上する神職とともに手を合わせ祈る人もいた。

摂社地主神社例祭

当宮が創建される以前から北野の地の地主神として御鎮座されている第一摂社の地主神社の例祭を四月十六日午前十時から齋行した。
地主神社は、『続日本後紀』の承和三年（八三六）二月一日の条に「遣唐使のために天神地祇を北野に祀る」あり、ここで遣唐使発遣の無事を祈ったとされている。古くは例祭に神輿も出たといわれている。



当宮創建より早く菅公祀る文子天満宮祭齋行 還幸祭は雨の巡行

末社文子天満宮例祭の文子天満宮祭を四月十八日から二十一日まで四日間に亘り齋行した。菅公薨去後の天慶五年（九四二）西ノ京に住んでいた多治比文子という童女が「右近の馬場（現在の本社鎮座地）に菅原大神を祀れ」との御神託を受けたが、貧しかった文子はそれに応えることが出来ず、自宅近くに小さな祠を建てて奉祀した。その後文子は、同じ御神託を受けた近江の神主の息子らと協力し当宮が創建された。文子宅は霊地として社殿を造り改め、文子天満宮と称して北野の神人によって護られてきた。その後、文子天満宮は曲折を経て上の下立売通天神筋上ル北町に遷り、さらに明治初めに当宮内の現在地に遷され、旧地は御旅所となった。文子天満宮祭は、御神霊が神輿に遷されて御旅



所に渡ってお祀りされるもので、地域の人たちからは「文子さん」「文子まつり」と呼ばれて親しまれている。

神幸祭の祭典は、十八日午後二時から西之京瑞饋神輿保存会（荒田匡会長）の会員らの参列の下齋行され、齋主が祝詞を奏上、御神霊が遷された神輿が、会員たちの供奉によって御旅所まで渡御した。沿道の人からは「行ってらっしゃい」の掛け声も飛んでいた。還幸祭の二十一日は、午後一時から御旅所を出御祭が齋行された。生憎の雨となったため、神輿に覆いをかけての巡行となったが、本社に到着後、御神霊が遷された御社殿で午後四時半から着御祭の祭典が齋行され、四日間にあたる文子天満宮祭を終えた。



雷除けと豊作を祈願 摂社火之御子社の例祭「雷除大祭」齋行

三光門前に鎮座の摂社・火之御子社の例祭である「雷除大祭」を、六月一日午前五時から齋行した。火雷神を祀る火之御子社は、当宮が創建されるより前に北野に祀られていた古社。古来より「北野の雷公」と呼ばれて、雷除け・火難除け・豊作の守護神として朝野の篤い信仰を受け、とくに朝廷では、雷神が雨を呼ぶため、雨乞いや豊作の祈願などを行って篤く崇敬した。こうした信仰は現代も続き、とくにこの日は、落雷を避けようと、電気工事従事者を始め、釣り人やゴルフカーなどの参拝が多いことでも知られている。



早朝の祭典は、開門前、古式に則り火打石で浄火を点じて齋行し、雷除けと五穀豊穡を祈願した。お祓いたした御札・御守りは、開門と同時に参拝者に授与され、授与所は終日、賑わいを見せた。

なお、御本殿前の中庭には、この日から人の背丈ほどの茅の輪が設置され、雷除けのお札などを授かった人や修学旅行生らが無病息災を祈って次々ぐり抜けていた。

酒造りの安全と業界の繁栄を祈願 新酒を御神前に供えて献酒祭齋行

酒造会社などから奉納された新酒を御神前に供え、五月二十九日午前十一時から献酒祭を齋行した。室町時代、当宮神人に麴造りの特権（北野麴座）が与えられたことから、当宮への酒造関係者の崇敬は篤い。多くの酒造会社などから奉納された新酒を供えた御神前において、酒造りの安全と業界の繁栄・関係者の無病息災を祈願した。御献酒頂いた酒造会社・酒造組合は次の通り。（順不同）

佐々木酒造・松井酒造・宝酒造・増田徳兵衛商店
・豊澤本店・黄桜・東山酒造・齊藤酒造・北川本家
・山本本家・月桂冠・京姫酒造・平和酒造合資会社
・藤岡酒造・キンシ正宗・玉乃光酒造・都鶴酒造
・招徳酒造・城陽酒造・奈良豊澤酒造・丹山酒造・関
酒造・大石酒造・長老・羽田酒造・浪乃音酒造・平
井商店・古川酒造・太田酒造・北島酒造・曉酒造
・松瀬酒造・喜多酒造・矢尾酒造・愛知酒造・藤居本家・吉田酒造・沢の鶴・白鶴
酒造・本野田酒造・日本盛・北山酒造・白鷹・松竹梅酒造・辰馬本家酒造・國産
酒造・万代大澤醸造・大澤本家酒造・大関・今津酒造・櫻正宗・菊正宗酒造・小
山本家酒造灘浜福鶴蔵・剣菱酒造・福徳長酒類・木下酒造・三宅本店・林酒造



特殊神饌供え 北野四季祭の一つ 青柏祭を齋行

六月十日午前十時から御本殿で青柏祭を齋行した。当宮では、立春の霞祭、初夏の青柏祭、立秋の御手洗祭、立冬の赤柏祭を、季節の変わり目の神事「北野の四季祭」と称し、古くから祓えと清めの信仰に基づく祭典として齋行してきた。中でも青柏祭は、当宮史料に「往古より祭式あり、新芽の葉を神供に穀を奉る夏季報賽の祭」とあり、炊いた米を柏の葉で包み、クルミと梅水を加えた特殊神饌を供え、神恩に感謝し、氏子崇敬者の無病息災を祈った。

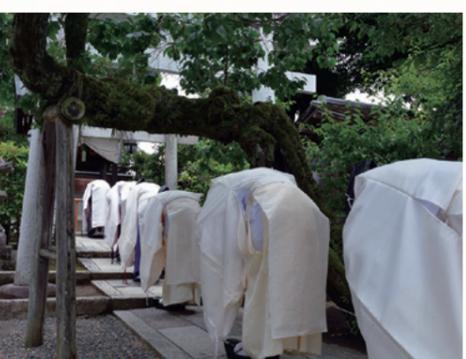


天門・北野の地に鎮座の日 宮渡祭齋行



北野の現在地に当宮が鎮座された日に当たる六月九日午前十時から、御本殿において宮渡祭（中祭式）を厳かに齋行し、往時を偲んだ。天慶五年（九四二）七月、西ノ京に住む多治比文子という童女に、大宰府で薨去された菅公の御神霊から「北野の地に鎮まりたい」との御託宣があった。しかし、彼女は家貧しくてそれに応えることが出来ず、代わりに自宅近くの小祠にお祀りした。五年後の天曆元年（九四七）、近江比良宮の神主神良種の子、太郎丸という少年にも同じ御託宣があり、文子・良種・北野朝日寺の僧侶最珍らが協力して平安京の北西（乾）の現在地に天満宮を創建した。その日が、村上天皇の御代、同年六月九日であり、毎年この日に宮渡祭を齋行し往時を偲んでいる。

竈社例祭



末社竈社例祭を、六月十七日午前十時から齋行した。元々御神前に供える神饌を調理する御供所に祀られていた台所の守護神である庭津彦神・庭津姫神と、火を司る火産靈神を、東門内の北側の竈社に竈大神としてお祀りしている。当社は、明治十四年のこの日に末社に列せられたことから、毎年例祭を齋行しており、祭典では神職らが氏子崇敬者各家庭の家の安全・火の用心を祈った。

なお、御社殿の床下には、昔から神饌調理に使われてきた大釜が納められている。

無病息災を祈る夏越の二神事齋行



この日の京都市内の最高気温は三〇・六度と真夏日となったが、露店も多く開かれ、境内は終日参拝者で賑わった。

御祭神菅公の御誕生日に当たる六月二十五日、御本殿で午前九時から御誕辰祭を厳かに齋行した。
菅公は、承和十二年（八四五）の六月二十五日、文章博士だった菅原是善公の第三子として京都で誕生され、延喜三年（九〇三）二月二十五日、配所の九州・大宰府で薨去された。
こうした御神縁によって、当宮では毎月二十五日を「天神様」の御縁日として祭典を行い天神市などを開いているが、御誕生日の六月はとりわけ「夏越天神」と呼ばれ、盛夏を控えての厄除けと夏場の健康を願う信仰が根付いている。



夏越天神 御本殿で御誕辰祭厳かに
楼門の「大茅の輪くぐり」人の波

御本殿における御誕辰祭は、境内で採れたもぎたての梅の実などが御神前に供えられ、宮司以下神職によって厳かに齋行された。
楼門での「大茅の輪くぐり」は、「夏越天神」の日の恒例の催し。大茅の輪は、直径五メートルもある京都では最大級の大きさで、開門と同時に参拝者が夏場の健康と無病息災を祈ってくぐり抜け、終日賑わった。

正月の特別な縁起物「大福梅」として、当宮職員によって調製される梅の実の摘み取りが、境内一円に植わる梅の木で、五月二十四日から一週間にわたって行われ、例年通り約二トンを摘み取った。
梅をこよなく愛された菅公にちなみ、境内には約五十種・千五百本もの梅の木があり、京都市内では屈指の梅の名所となっている。この梅の木から採取した実を調製した「大福梅」は、正月の祝膳に欠かせない厄除け信仰の縁起物として参拝者の人気が高い。

正月の縁起物「大福梅」の摘み取り
青々とした梅の実を丁寧に取り



「大福梅」は、招福息災の祈りを込めて、白湯に入れて頂く元旦の祝膳に欠かせない縁起物。
天曆五年（九五二）、疫病流行の折、罹患された時の村上天皇が、この梅茶を服されて平癒されたとの故事にちなんでいる。

梅の実の摘み取りは、毎年この時期恒例の作業で、初日は巫女のみで行われ、六人の巫女が、境内各所で青々とした梅の実を、脚立なども用いながら一粒一粒丁寧に採取した。翌日からは、神職や関係業者の方々、崇敬者なども加わって、数日間に亘っての作業となった。

摘み取った梅の実は、直ちに樽で塩漬けにされ、七月の梅雨明けを待って、御本殿前中庭を始め、境内において、神職・巫女たちの手によって丁寧に土用干しにされる。

二條流の献茶式齋行

煎茶道の二條流献茶式を六月十六日午前九時から御本殿にて齋行した。

二條流は、明治元年、神戸の地にて水島雅莊氏によって創設された煎茶道で、毎年当宮御神前にて、献茶式を御奉納いただいている。

社中の方々が大勢参列される中、七世二條雅瑛家元のご奉仕によって厳肅にお点前が行われ、御神前に煎茶が献上された。献茶式の後は、明月舎に恒例の茶席が設けられ、社中の方々が煎茶を楽しんだ。



夏越の健康を祈り半年間の穢れを祓う
夏越の大祓に約一千人が参列



夏越の大祓式を六月三十日午後四時から御本殿前の中庭で齋行した。日曜日とあって、小雨に見舞われた昨年を大幅に上回る約一千人の氏子崇敬者が参列した。
六月と十二月の晦日に齋行される大祓は、無意識のなかで身についた罪や穢れを祓い清める古来からの神事。宮司を始めとする神職・参列者が声を揃えて大祓詞を奏上し、切麻を身に振りかけて邪気を祓った。その後、神職・神社役員に続いて神職の先導で参列者が中庭に設置した背丈ほどの茅の輪を古式通り三度くぐって半年間に身についた罪・穢れを祓い清め、夏越の健康と無病息災を祈った。
また、氏子崇敬者が納めた人形・車形代なども唐櫃に入れられ、神職が担いで茅の輪をくぐって祓った。



令和再興 北野祭

八月五日～十三日

北野萬燈会・七夕ライトアップ

来る令和九年齋行の半萬燈祭の機運を宣揚するため、本年より本格的な提灯献灯を行う。三光門前参道に、新たな提灯台を設え、崇敬者からの奉賛提灯に火が点される。御祭神に願いの灯りが届けられる。

また、平安京の天門に鎮座する当宮は、日・月・星の三辰信仰の聖地であった。その境内一円に色とりどりに飾られた七夕笹を灯光で照らし、幻想的な雰囲気の中で、夜間参拝を実施する。



八月七日

御手洗祭

当宮では七夕神事を御手洗祭と称して齋行し、内陣に菅公御遺愛と伝わる松風の硯・角盤・水差しに梶の葉と色紙を添えお供えする。北野の四季祭の一つにも数えられるこの祭典は、北野祭の初めの祭儀とされ、祓いと清めを意味する重儀である。古くは祭典中に梶の葉に水を掛ける儀式があり、梶の葉が手の形に見えることから御手水を表しているといわれている。



九月四日

例祭【大祭】・北野御霊会

永延元年（九八七）一條天皇が初めて北野祭を勅祭として齋行された由縁による、一年で最も重要な祭典。

前日より参籠・潔斎した宮司以下神職が御本殿の御扉を開き、雅楽の調べの中神饌を供し祝詞を奏上する。引き続き比叡山延暦寺一山出仕の僧侶たちが、御本殿内に設けられる密壇の前で法華三昧を法要し、御祭神の御霊和めと疫病退散を祈り上げる。



十月一日～五日

北野祭 瑞饋祭

菅公薨去後、大宰府に随行した北野の神人が、京都へ戻って始めたとされる秋の豊穰祭。北野祭の最後を飾る祭祀として、村上天皇御寄進「第一鳳輦」、一條天皇御寄進「葱華輦」など、絢爛豪華な渡御列が進み、期間中は表千家ご奉仕による献茶祭、七保会ご奉仕による甲御供奉饌等が行われる。また、御旅所に奉納される「ずいき御輿」は、西之京瑞饋神輿保存会の人たちによって造られ、四日に氏子地域を巡行する。



七月二十五日

新茶奉献奉告祭

京都近隣の宇治・宇治田原・木幡・城陽・佐山・京田辺・醍醐・伏見・向島・綴喜・山城・南山城・信楽など、銘茶の各生産地で摘まれ奉納された新茶を御神前に供え、茶業の安全と発展を祈願する。

当宮と茶業との御縁は、天正十五年（一五八七）当宮境内で豊臣秀吉公により開かれた北野大茶湯の由縁に始まり、以来当宮は、茶業家からの信仰が殊に篤い。



八月十九日～三十一日

奉納図画展

夏休みの恒例となつている奉納図画展を、八月十九日午後より西廻廊にて開催し、地域の子供たちが描いた力作を展示公開する。

九月一日

奉納図画展授賞式

入賞者参列のもと、御本殿にて祭典を齋行し、優秀作品の授賞式を執り行う。

祭事暦 (7月1日～10月5日)

《7月》

1日 午前10時 月首祭
4日 午後1時半 北野天満宮講社大祭
12日 午前10時 當日祭
15日 午前10時 月次祭
25日 午前9時 月次祭
午前11時 新茶奉献奉告祭
午後4時半 夕神饌

《8月》

【赤字表記：北野祭礼】

1日 午前10時 月首祭
《北野御手水神事》
6日 午後4時 御手洗祭前夕饌
7日 午前10時 御手洗祭
午前10時半 天満宮講社奉賛活動現況奉告祭
11日 午前11時 学業大祭
15日 午前10時 月次祭
25日 午前9時 月次祭
午後4時半 夕神饌

《9月》

1日 午前10時 月首祭
午後3時 奉納図画展授賞式
3日 参籠
4日 午前10時 例祭・北野御霊会（大祭）
15日 午前10時 月次祭
17日 午後4時 明月祭
23日 午前10時 秋季皇霊祭遥拝式
24日 午前9時 神輿飾り
25日 午前9時 月次祭
午後4時 夕神饌
26日 午後4時半 稚児奉仕者奉告祭
30日 参籠

《10月》

《瑞饋祭》
1日 午前9時 神幸祭 出御祭（本社）
2日 午前10時 献茶祭（御旅所）表千家宗匠奉仕
3日 午後3時 甲御供奉饌（御旅所）西ノ京七保会奉仕
4日 午前10時 還幸祭 出御祭（御旅所）
5日 午後3時半 后宴祭・稚児奉仕終了奉告祭（本社）

月釜献茶 (7月1日～9月30日)

《7月》

1日 献茶祭保存会	半床庵社中	(明月舎)
14日 梅文会	各流派合同茶会	(松向軒)
15日 献茶祭保存会	谷口 宗嘉	(明月舎)
松向軒保存会	休 会	(松向軒)
28日 紫芳会	紫 芳 会	(松向軒)

《8月》

1日 献茶祭保存会	前田 宗音	(明月舎)
11日 梅文会	休 会	(松向軒)
15日 献茶祭保存会	休 会	(明月舎)
松向軒保存会	休 会	(松向軒)
25日 紫芳会	休 会	(松向軒)

《9月》

1日 献茶祭保存会	長島 宗里	(明月舎)
8日 梅文会	安刈 宗悦	(松向軒)
15日 献茶祭保存会	田中 宗真	(明月舎)
松向軒保存会	秦 宗周	(松向軒)
22日 紫芳会	村山 昭宏	(松向軒)



梅風会だより

全国天満宮梅風会第五十八回総会開く

全国天満宮梅風会（会長橋重十九当宮宮司）の第五十八回総会が、六月十八・十九日の両日、福岡県の太宰府天満宮を主会場に、約一五〇名が参加して開かれた。十八日は太宰府天満宮に正式参拝した後、同宮余香殿にて総会を開催、令和五年度の経過や収支会計報告、役員改選などが行われた。

尚、当会から石川県支部へ能登半島地震義捐金が贈られたことに対し、厚見正充石川県支部長（金澤神社宮司）より、御礼の言葉が述べられた（金澤神社厚見匡史権禰宜代読）。

○次年度当番地は兵庫県

次年度（第五十九回）の全国総会は兵庫県にて開催すると本部より報告があり、兵庫県支部久野木啓太支部長が、令和七年六月十九・二十日に、湊川神社及び伊弉諾神宮に正式参拝の後、総会を開催すると説明、「淡路島の食事や翌日の観光も堪能していただけるよう県内会員一同尽力する。是非多数のご参加をお待ち申し上げます」と挨拶された。

○和やかに懇親会 晴天の下、阿蘇神社参拝



懇親会では西高辻信宏副会長（太宰府天満宮宮司）が開会の挨拶、西高辻信良名誉会長が乾杯の音頭を取られ、和やかに会員同士懇親を深めた。翌十九日、平成二十八年の熊本地震で甚大な被害を受けた阿蘇神社に正式参拝、復旧・再建された楼門や拝殿などを見学し文化財の保存修理の経過を学んだ。

氏子講社だより

氏子講社（宮階有二講社長）の常任理事会が六月十二日、文道会館に理事九人と宮司・権宮司の出席のもと開かれた。

開会に先立ち宮司が「コロナが明け、いろんな情報が入り乱れ、何が真実か見えにくい世の中になっており、天神信仰が益々必要な時代だと思っている。菅公が亡くなられ三年後には千二百二十五年を迎える。数年前から御手洗祭・例祭・北野御霊会・瑞饋祭と続く一連の祭礼を令和の北野祭と位置付けて斎行しているが、神輿を再興し、勅祭だった北野祭の復興を目指している。皆さま方の更なる協力をお願いしたい」と挨拶した。引き続き宮階講社長が「瑞饋祭まで後四か月ほどになった。巡行時のトラブルなどがないよう準備万端、十分気をつけて頂きたい。本日は講社の収支決算や瑞饋祭の計画などの案件についてご審議よろしくをお願いしたい」とご挨拶された。

この後、議事に入り、令和五年度の収支決算や令和六年度の収支予算案を拍手で承認した。さらに十月一日から始まる北野祭瑞饋祭の日程や御鳳輦を始め各儀物の準備等の担当学区・講などを拍手でもって承認した。昨年までの瑞饋祭と異なる点として、神輿飾りと片付けの際には、御本殿に参拝した後御奉仕頂くことや、一日の神幸祭では、一の鳥居前で神職が参拝者に向けて北野祭瑞饋祭の意義などについて説明を行う旨が事務局から発表された。



さらに三年後に迫る千二百二十五年半萬燈祭のことが議題となり、権宮司から「新しい神輿は、当宮に遺る古文書類を参考に、校倉から見つかった日本最古の神輿金具をもととした中世の神輿を再興すべく鋭意研究を進めている」との方針が示された。

北野天満宮と御神縁深い京丹後大宮賣神社で御田植祭斎行 北野祭保存会・京都産業大学下出ゼミも参加



権宮司はじめお田植え祭奉仕者

下出祐太郎ゼミ生約四十人と当宮ボーイスカウトの子供約十人が水田に入り、苗を一つ一つ丁寧に泥に差し入れ田植えを行った。田植えの後、参加者は近くの施設に場所を移し、氏子の方々の交流会を催した。互いの神社の神輿について等、様々な意見交換が行われ、交流を深めた。

大宮賣神社は御祭神大宮賣神をお祀りしており、その歴史は弥生時代にさかのぼると考えられている。主基方の地方であったことから周枳社（主基社）とも呼ばれている。当宮一帯もかつて主基地方に選ばれたことから、境内に周枳社が祀られており、境内西側（御土居沿い）を流れる紙屋川は古くは荒見川と呼ばれ、大嘗祭に先立つ祓の儀式（荒見川祓）が行われるなど、大宮賣神社と当宮には深い御神縁がある。

四月二十七日、快晴に恵まれた京丹後市周枳御鎮座の大宮賣神社（島谷康夫宮司）にて御田植祭が斎行された。大宮賣神社は当宮と御神縁深く、例年崇敬団体が参列しており本年も北野神輿会・北野祭保存会（井上経和会長）が参列した。まず特設された斎田に稲穂を挿し、豊稔の祈りを捧げた後、門前の田んぼで田植えを行った。北野神輿会・北野祭保存会は、応仁の乱で途絶えた「北野祭」の再興を目指し様々な取り組みを行っている会であり、その一環でかつて大嘗祭の主基の地であった周枳地域の方々の協力の下、田植えや稲刈りの奉仕を行い、そうして収穫された米を、秋に斎行される北野祭瑞饋祭にお供えし、奉仕者に振舞う宮弁当として調理している。今年も京都産業大学にて勅祭北野祭の歴史や内容を研究し、瑞饋祭の奉仕を行うなど当宮の祭典に携わってきた。



田植えの様子

全国天満宮梅風会 京都支部役員会開く

令和六年度の全国天満宮梅風会京都支部（宇佐美伸二支部長、事務局当宮）の役員会が六月四日、文道会館に十人（当宮から顧問の宮司、理事の権宮司が出席）の参加のもと開かれた。



議事は宇佐美支部長によって進められ、令和五年度の支部の活動が報告された後、令和六年度の支部総会の日程や内容などについて協議が行われた。総会は九月十三日とし、従来通り神社参拝を含めた観光に力点を置いた総会にするか、勉強会にするかをめぐって意見が交わされた。菅公の御神忌千二百二十五年半萬燈祭が三年後に迫っており「菅公について、支部としても学ぶべき機会を設けた方がいいのでは」と、勉強会にする方向で意見がまとまった。

さらに千二百二十五年半萬燈祭の記念事業として、朱印帳作成の件などが話し合われた。また、当宮主催により令和八年四月十八日から六月十四日まで京都国立博物館で「北野天神展」（仮称）を開くことが決まっております。「ポスターやチラシ配布など支部のみならずの支援をお願いしたい」との要望が事務局から行われた。

天神さん 思い出写真館



昭和五十二年（一九七七）春斎行の菅公御神忌千七百七十五年半萬燈祭における御本殿前で奉納された横綱土俵入りの風景である。

右の写真は、第五十四代横綱の輪島関であり、左側は第五十五代横綱の北の湖関である。二人は何度も優勝を争った好敵手で、直前の三月場所では、北の湖関が輪島関を破って全勝優勝を遂げている。

北の湖関は、北海道出身で「北の怪童」の異名を持ち、幕内優勝二十四回の名横綱。現役引退後は日本相撲協会の理事長を務めた。一方、輪島関は石川県の出身。幕内優勝十四回。両横綱は何度も優勝争いをするほど強く「輪湖時代」と呼ばれた。



当宮での両横綱の土俵入りは四月三日に行われたが、当時の記録を紐解くと「黒山の観衆の拍手で迎えられた両横綱が本殿前に進み、豪快な土俵入りを奉納、その見事さが参拝者をうならせた」とある。人気絶頂の両横綱を一目みよう、早朝から多くの人が詰めかけたため、当宮では整理券を発行するなど安全策に努めたという。



御本殿前の様子

令和九年

菅公御神忌 千百二十五年半萬燈祭 提灯献灯ご案内

菅原道真公をお祀りする当宮では、菅公御薨去より五十年毎に「大萬燈祭」、その間の二十五年毎に「半萬燈祭」と称して式年大祭を斎行しております。その際には古来、萬（万）の火を灯し、御祭神の御心をお慰めする信仰に基づき、境内一円に多くの火を灯してまいりました。来る令和九年に迎える御神忌千百二十五年の半萬燈祭においても、境内各所に提灯の火を灯し、厳肅且つ盛大に式年の御祭を斎行致したく、令和六年六月二十五日（火）に早速当宮御本殿前にて提灯献灯始祭を斎行いたしました。このお祭りを第一歩として、現在三光門前に凡そ千七百燈が掲げられている提灯を、楼門、東門、一の鳥居と境内全体を照らせるほどに掲げるべく、提灯の御献灯を受付しております。



参道に連なる萬燈提灯

平安時代より現在まで続く天神様の信仰を次代へと紡ぎ、世の平穏と国家人民の安泰を祈念する式年大祭を盛大に斎行すべく、ぜひ皆さまのお名前を記した提灯を掲げ、天神信仰の更なる発揚にお力をお貸しく下さいませ、心よりお願い申し上げます。

提灯献灯のご案内
一燈 一〇、〇〇〇円

献灯期間
令和六年夏から
令和九年秋まで約三年間



*ご芳名は前面に記名致します。
*文字数が多いと文字は小さくなります。
*提灯掲出場所は神社に一任願います。
*半萬燈祭期間後に提灯は焼納させて頂きます。



北野天満宮講社
ご案内



半萬燈祭
ご案内

天神信仰の主な歴史（注）歴史事項 北野天満宮事項 伝説事項 菅公薨去後 およそ百年かけて醸成され千年受け継がれる天神信仰

承和十二年	菅原道真公（菅公）御誕生（父是善母伴氏） 父是善との親子の契り
齊衡二年	初めて詩「月夜に梅花を見る」を作る （菅公十一歳）
貞観元年	菅公元服 文章生を目指し勉学 菅公石清水八幡宮参拝 （菅公十八歳）
貞観四年	文章生の試験に合格 （菅公二十二歳）
貞観八年	比叡山延暦寺円仁の『顕揚大成論』の序文を書く 文章得業生となる （菅公二十六歳）
貞観九年	文章得業生となる （菅公二十六歳）
貞観十二年	方略試（当時最高の国家試験）に合格 この間少内記（詔勅の起草係）式部少輔など任ぜらる（菅家廊下を継承） 讃岐守に任ぜられる （菅公四十二歳）
仁和二年	《阿衡問題》につき藤原基経に意見書を送る これにより宇多天皇に挙用され政治の刷新を図ると共に平安京文化の礎を築く （菅公四十四歳）
仁和四年	従四位下『三代実録』『類聚国史』の編纂に着手 （菅公四十五歳）
寛平四年	菅公石大臣に任ず 位人臣を極める （菅公五十五歳）
寛平五年	『菅家文章』『菅相公集』『菅家集』を献上す（三善清行、菅公に辞職を勧告） 一月二十五日大宰権帥に左遷される 大宰府南館で謫居の日々（菅公五十七歳）
昌泰三年	詩集『菅家後集』を京の紀長谷雄に送る 天拝山で「天満大自在天神」となる 二月二十五日 配所において薨す （菅公五十九歳）
延喜三年	味酒安行 大宰府の御墓所に祠堂を建てる（現在の太宰府天満宮） 門弟許され 京の都西ノ京にて菅公神霊を祀り始める
延喜六年	菅公を元の右大臣・正二位に叙し 左遷の宣命を破棄す
延長元年	多治比文子 比良宮神官の子太郎丸らに神託（朝日寺の僧最鎮）
天慶元年	村上天皇により平安京の天門北野に鎮座す
天曆元年	村上天皇御鳳輦御寄進
天曆三年	村上天皇勅命により難波宮の地に菅公神霊を祀る（現在の大阪天満宮）
天徳三年	右大臣藤原師輔 北野の神殿を増築し神宝を献ずる
寛和二年	慶滋保胤「文道之祖詩境之主」の願文を草す
寛延元年	一條天皇より北野社官幣に預り「北野天満大自在天神」の神号を賜る 北野社は官幣社となり勅祭北野祭が斎行される（江戸末期迄）
正暦四年	一條天皇御鳳輦御寄進
寛弘元年	左大臣・正一位 次いで太政大臣を追贈される
永保元年	一條天皇初めて臣下を祀る北野社に行幸 以後歴代天皇の行幸に与る
康和三年	北野社が国家の大事を祈る二十二社に臣下で異例の加例
建久五年	大宰権帥大江匡房により大宰府・安楽寺にて神幸式大祭が斎行される
承久元年	『北野天神縁起』建久本成る 『北野天神縁起』承久本成る

応永八年	一四〇一	北野経王堂成る
応仁元年	一四六七	室町幕府の崇敬で「北野祭」隆盛を極めるも応仁の乱より途絶える
天正十五年	一五八七	「北野大茶湯」を豊太閤・千利休居士ら催す
慶長八年	一六〇三	出雲阿国が北野境内で初めてややこ踊り（歌舞伎踊り）を公演（歌舞伎発祥）
慶長十二年	一六〇七	豊臣秀頼公 北野神社殿を造営する（慶長の大道宮）
江戸年間	後期	後西天皇御宸筆 勅額「天満宮」御寄進（三光門掲額）
元治元年	一八六四	北野をはじめ大宰府・大阪・湯島など主要な天満宮に「和魂漢才碑」建立
慶応四年	一八六八	勅命により北野祭臨時祭再興
明治四年	一八七一	神仏判然令（神仏分離）により 天台宗比叡山延暦寺のもと
明治三十五年	一九〇二	社務を統括していた曼殊院との凡そ千年間に亘る神仏習合が終わる
昭和二十七年	一九五二	北野天満宮 臣下で異例の官幣中社となる（のち官幣中社）
平成十四年	二〇〇二	太宰府天満宮 国幣小社となる（のち官幣中社）
令和二年	二〇二〇	菅公千五十年大萬燈祭を斎行する
令和九年	二〇二七	菅公千五十年大萬燈祭を斎行する 例祭（かつての北野祭）斎行に伴い 比叡山延暦寺と共に北野御霊会を再興 菅公千二百二十五年半萬燈祭を斎行予定

今昔マップ

◆北野社創建（平安時代）至現在
◆現在の京都

■平安京全域
■平安宮 大内裏

注① 国都平安京大内裏で千百年間天皇の祭政が執行され、日本文化が育まれてきた。
注② 平安京・大極殿の天門に北野、鬼門に比叡山、宇多天皇創建の仁和寺などが精神的中心となって熟成の礎となった。
注③ 八幡さま、稲荷さまを始め多くの神仏は国都平安京（元の国都平城京）の近畿より全国に伝播。



紅梅殿結婚式

日本文化の発信地、 紅梅殿からはじまる家族の日

貞観元年（八五九年）菅公が十五歳の元服の折、母君は菅公の前途を祝し、

『久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな』の和歌を詠み励まされました。

我が国で最初に家風を表されたのが、菅公の母君であったと伝えられています。立派な家風をもった稔り多い新たな家庭を築かれますようにとの願いをこめて、菅公邸宅ゆかりの紅梅殿での神前結婚式から新しい「家族」がはじまります。



天神様の秋まつり

きたのさいずいきまつり

北野祭瑞饋祭

●由緒

京都の代表的な秋祭りとして知られる瑞饋祭は、村上天皇の御代にはじまったとされる「北野祭」が起源と伝えられています。

年に一度、御鎮座の往時に思いを致し御神霊を御旅所より「お迎え」することで、氏神としての天神様を改めて意識し感謝する心が育まれます。



十月	
一日 神幸祭	午後一時～午後四時 行列出発 御旅所到着
二日	午前四時～午後三時 献茶祭 （表千家宗匠奉仕）
三日	午後三時～午後四時 甲御供奉饗 （七保会奉仕）
四日 還幸祭	午後一時～午後三時半 行列出発 本社到着 后宴祭 （八乙女舞奉納）
五日	午後三時半～

七五三

詣は、知恵の神様

北野天満宮へ

七五三詣は、子供の成長に感謝し無事を祈り、神社にお参りする大切な人生儀礼です。子供は国の宝であり、親にとってもかけがえのない宝です。北野天満宮で七五三詣をし、子供の成長と無事を祈るとともに、さらに天神様の御加護で知恵を授かりましょう。ご家族お揃いでのご参拝をお待ちいたしております。

★七五三詣の方は、史跡御土居もみじ苑入苑優待あり

- 一、受付日
十一月中、毎日受付いたします。
※但し、十一月二十三日（木）、十一月二十六日（日）は、祭典のためご祈禱を中断する時間帯がございますのでご了承下さい。
※尚、十一月以外の月も、事前にお申込み下さればお受けいたします。
- 二、七五三詣初穂料
一人 五千円より
二人 八千円（兄弟姉妹に限る）
三人 一万二千円（兄弟姉妹に限る）
- 三、授与品・記念品
知恵守 千歳飴 祝い笹、学用品セット
- 四、案内状持参の特典
特別授与品の「勾玉」を進呈

御縁日 境内ライトアップ

毎月25日は天神さんの御縁日。境内特別ライトアップ!

定期購読のお知らせ

- 定期購読 1,000円（1年分）季刊・年4回発行
- 学校・教育機関でお申込みの場合は無料発送。
- お申込み・お問い合わせは、社務所まで。



右記QRコードを携帯電話やスマートフォンで読み込むと北野天満宮の最新情報にアクセスできます。上記の各SNSでもご案内しております。

●アクセス

名神高速道路南インター又は東インターより約30分
第二京阪道路鴨川東インターより約20分
JR京都駅より市バス50系統
JR・地下鉄二条駅より市バス55系統
JR円町駅より203系統
地下鉄今出川駅より市バス51・203系統
京阪出町柳駅より市バス203系統

●参拝時間

■7時～17時
但し、毎月25日（御縁日）は6時30分から20時
※青もみじ苑・もみじ苑・梅苑「花の庭」のライトアップ期間や正月等は夜間も開門しています。
最新情報はホームページ等のお知らせ記事をご覧ください。

■文道会館・授与所 受付時間 9時～16時30分

京阪三条駅より市バス10系統
阪急大宮駅より市バス55系統
阪急西院駅より市バス203系統
京福電車白梅町駅より徒歩5分
いずれも北野天満宮前下車すぐ

●御祈禱

■受付時間 9時～16時
■受付場所 御本殿東側授与所

●駐車場

毎月25日は、御縁日のため駐車できませんので公共交通機関でお越しください。